

丈左 さうお云やるが、實説でござるか。
彦助 何しに偽りを申さうや。身共も誠に安堵いたした。
中間 お喜びなされませ〜。

ト捨てりふにて兩人左右より近づき、油断を窺ひ
兩人捕つた。

ト兩人胸づくしを取る。丈左衛門心得、脇差を取らうとする。彦助手早く取つて門の方へ投げやる。
丈左衛門「ハッ」と驚き、二人を投げのけ、つか〜と行かうとする。外より捕手「捕つた」と駈け
こむ。丈左衛門へかゝる。このとき奥より中間、或ひは着ながしの若黨二三人、つか〜と出で
皆々 何者ぢや。
ト見て

ヤ、い、い、い。

ト驚き逃げて入る。三人立廻りにて、丈左衛門、屋體の内に掛けたる刀を手早く取り、組つく三人を
見事に切る。門口に窺ふ捕手頭、一々下知する思ひ入れ。捕り手、だん〜とかゝり、見事に切らる
る。此うち物凄き鳴り物、奥より丹下、次郎走り出で、丈左衛門へかゝり、立廻りよろしく、丈左衛

門兩人を切つて捨て、手水鉢の柄杓を取り、水を汲み、一口飲んで思ひ入れあり、悠々と門口へ出よ
うとする。外に窺ふ捕手頭、身ごしらへして「捕つた」とかゝるを、丈左衛門拔打ちに袈裟に切り倒
し、血刀をひつさげ向うへかゝる。此うち始終捨て鐘、早拍子木、物凄き合ひ方。揚げ幕より十次兵
衛、鎖鉢巻、大小、四天の形、十手捕り繩をもち、つか〜と出で、丈左衛門をさゝへ、本舞臺ま
で押し戻し、立廻つてきつと留る。丈左衛門見て

丈左 ヤ、い、い、い。其方は南方十次兵衛、すりや鴻野家へ歸參なし。

十次 汝を召捕る役目を乞ひうけ、二番手遅しと扣へしに、組子をなやめて逃げゆくとも、最早叶はぬ
天の網。身が越度たるお家の重寶、尋ね出して差上げたれば、以前に變らぬ十次兵衛、弟與兵
衛が切腹も、みな其方がなすところ、弟の敵丈左衛門、腕を廻すか、但し又、この場で踏みつけ
繩かけうか。サ、サ、い、い、い、サアなんと。

丈左 小癩な南方十次兵衛、丈左衛門が死者狂ひ。切つて〜切り抜ける。道明けて通すまじきや。

十次 お家に仇する國賊め、腕まはせ。

丈左 刀の切れ味、覺悟なせ。

十次 小癩な……捕つた。

捕手動くな。
兩人どつこい。

ト草鞋を打ちつける。丈左衛門、切つて落す。十次兵衛、十手にてかゝる。立廻りよろしく、これより詠らへの鳴り物にて、兩人花やかなる捕り物のタテよろしくあつて、「ドッコイ」ととまる。後へ捕り手大勢、弓張り、十手にて、バラ〜と取巻き

三四六

先づ今日はこれぎり。

めでたく

とよんがく。

打出し

四天王權陣

四天王櫓礎

第一番目 三建目

石山寺の場
櫓の森の場

役名——伊賀壽太郎成信。源の頼光。市原野の鬼同丸。大宅太郎光遠。泥龜の洞九郎。鰐鮫の沖六。木鼠の利助。柳生七郎。庄屋、與茂八實ハ、獺の闇藏。狸のほん八。足輕、轟郡平。後ニ物部平太有風。廻國修行者、當山實ハ、相馬六郎公連。頼忠息女、粧姫實ハ、榭花女。保昌妻、和泉式部。二の瀬源六妹、御手洗。腰元、冬野。同、置霜。同宿、西念。同、慾念。

本舞臺、三間の間、高足の御簾屋體、上下、櫻の立ち樹、日覆より絲櫻の吊り枝、すべて石山寺源氏の間の飾りつけ。爰に洞九郎、肉色の中親仁、藁苞を背負ひ、立ちかゝりゐる。柳生七郎、上下侍ひの形にて支へ居る。下に與茂八、ふんごみ、庄屋の拵へにて扣へゐる見得、音樂にて幕明く。柳生 コリヤ、其方どもはいづれへ參る。

洞九 イヤ、どこへも行きやしません。この石山へ、保昌さまのかみさんがござるといふ事ゆゑ。

與茂 ちと川事があつて参りました。
柳生 その保昌さまは身が御主人。奥方へ用事とは合點が行かぬ。賤しい者ども、罷りならぬ。

洞九 イ、ヤ、逢はにや成りませぬ。

ト向うにて
光遠 サア、女郎ども、式部が居間へ案内いたせ。

ト管絃になり、大宅光遠、上下にて、腰元冬野の襟袢を取り、引摺つて来る。置霜附きそひ出で來り
花道にて

置霜 モシ、光遠さま、そりやあなた。

冬野 御無體と申すものでござります。

光遠 何が無體。サア、早く源氏の間へ案内しをらう。

ト舞臺へ来る。

洞九 お侍び、和泉式部に逢はせてもらはう。

柳生 ヤア、下郎の分際として、奥方に何の用事。

冬野 それ、光遠さまも理不盡な、奥様のお通夜の間へ

置霜 踏み込まうとは、お侍ひにお似合ひなされぬ。お側仕への我れ、
兩人 相成りませぬ。

光遠 成らぬと申して、對面いたさず置かうか。保昌が妻の和泉式部、心願あつて、この石山に通夜
とは合點がゆかぬ。かねて頼信預かりの、太政官の御正印、紛失との風聞。その眞偽を糺し参れ
と、髭黒公のお指圖。案内がならずば、式部をこれへ引摺り出せ。

洞九 オ、さうぢや。和泉式部が爰へ出れば、この親仁も調ふる事を調ふと、はるくあの矢橋
から、足も腰も堪るものかえ、サア、逢はせにや奥へ踏ん込んで逢ふぞよ。

與茂 これサ、洞九郎、その式部とやら、しきみとやらに、逢ひさへすれば、金が出来ると云ふから、濱
年貢のたまり、この庄屋の與茂八も附いて來たが、向うはお歴々さうなが、減多な事云うて、
おれまで難儀をかけまいぞよ。

洞九 ハテ、當の無い事に連れてくるおれではないワ。それとも氣味が悪くば、観音へでも参つてござ
れ。其うちに埒明けて置かう。

與茂 そんなら、さうしてもらはう。おれは生れ附いて、理屈と喧嘩はきつい嫌ひ、好きな物は酒と女

洞九 行かつしやいよ。

與藏 まだ好きなのは錢と金……その金の出来るまで、本堂で待たうか。

ト下座へ入る。

柳生 いかなる筋か知らねども、御祈念のうちには、お物忌も同然。

置霜 光遠さまにも今日は、お歸りあつて追つての御沙汰に

兩人 遊ばしませい。

光遠 それをわい等に習はうか。物忌と吐かすが猶怪しい。たつて妨げなさは容赦はせぬ。

洞九 オ、さうぢや。あの座敷へ踏ん込んで逢つて見せるぞ。

柳生 さう云や猶罷りならぬ。

光遠 小癩な。そこ退け。

ト立廻つて

洞光 退くまいか。

ト留める。御簾の内にて

和泉 ヤア、希人へ對面。皆、慮外せまいぞ。

ト唄になり、御簾上がる。内に和泉式部、襦袢衣裳、机に向ひ、短冊に歌を書いて居る。側に三方の上へ結構なる蒔繪の刀箱を載せてある。

柳生 奥方、最前よりの仔細

女兩 お聞きられましたか。

和泉 自らは、上東門院に宮仕へせし身も、今は保昌が妻となれば、何卒秀歌を世に残したく、紫式

部が物語りに習ひ、この源氏の間に通夜なして、浮みし一首「あらざらん。この世の外ほかの思おもひ出でに、いま一度の逢あふよしもがな」皆みなの者、なんと、どうあらうぞ。

ト三方を持ち、下りる。

柳生 その儀は不鍛練な拙者なども

女兩 御名歌と存じますわいなア。

光遠 これサ、式部どの、歌どころではござるまい。こなたの夫保昌が育て君、あの頼信は身持ち放埒ほうらち預あかりの御正印、先達せんたつてより關白家くわんぱくけにて御催促ごそいそく、差上げぬは源家の者ども、野心やんしんを構かまへて動亂どうらんの基もと

和泉 イヤ、全く以て。

光遠 無いとは云はれぬ。亂れのしるしは、時ならぬ櫻の返り咲。

和泉 イヤ、冬のうちより一陽の時來れば、花も開くは、めでたい吉左右。

光遠 イ、ヤ、不吉の前表サ。

洞九 ア、コレく、其方ばかり理屈を云はずと、おれにもちつと云はせてもらはう……コレ、その

和泉式部といふは、この洞九郎が娘だ。ヤレ娘、大きくなつたなア。

ト寄らうとする。和泉式部、心得ぬこなし。柳生、腰元、立ふさがり

柳生 待て。さまざまな事を吐かすが、奥方に向ひ、娘とは

女兩 滅相な人ぢやわいなア。

洞九 滅相も何もない。おらが娘だと云ふのだ。

トわめく。

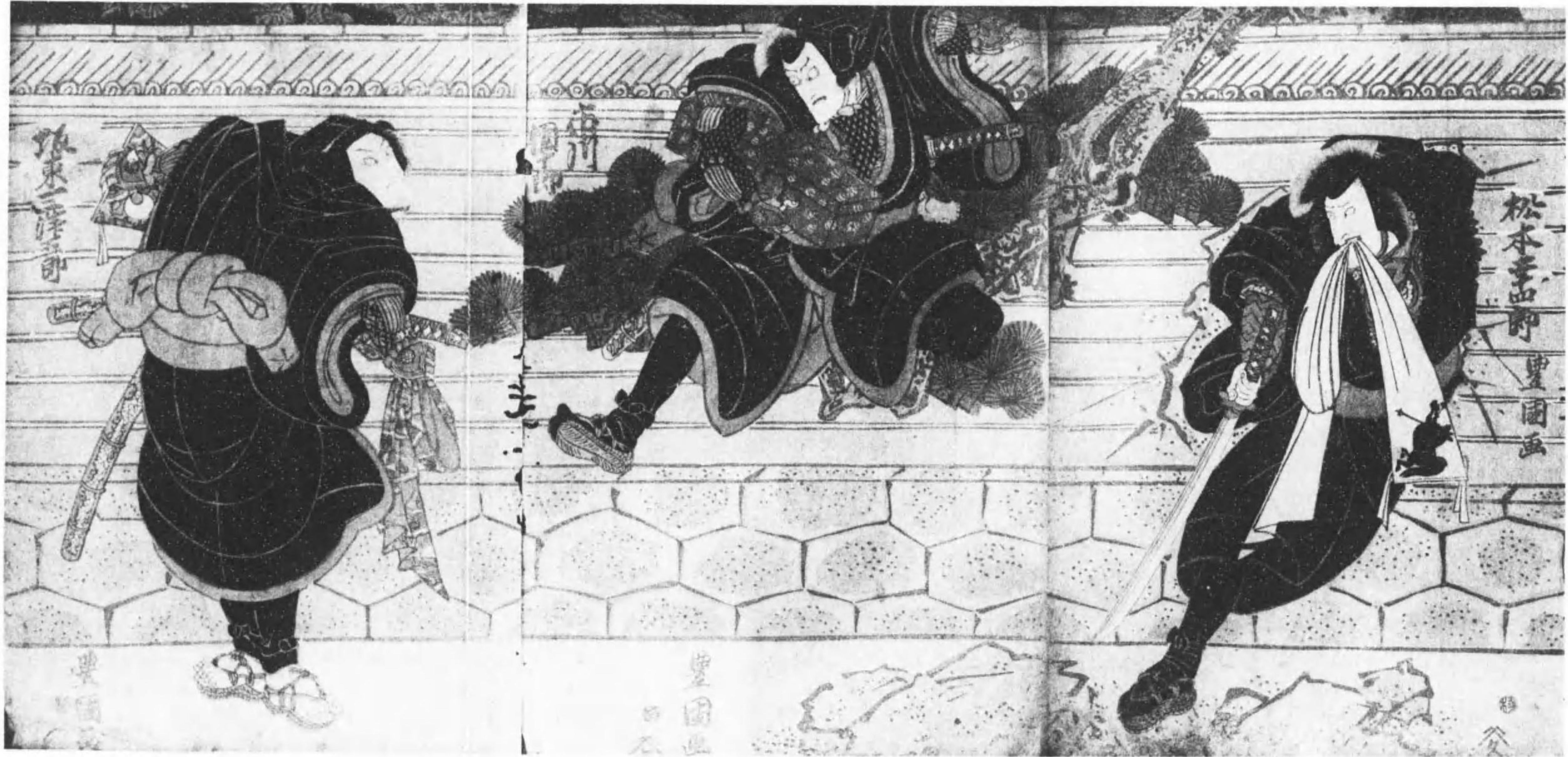
光遠 やかましい。老ほれめ。此方の邪魔になる……ヤアく、小者足輕は。

郡平 畏つてござります。

ト向うより郡平、剃立て、足輕にて、六尺棒を持ち、ツカくと出て舞臺へ來り

ハッ、御用とござりまするゆゑ、轟郡平、早速これまで……いかなる御用か存ぜねど、堪忍五





下向より郡平、剃立て、足輕にて、六尺棒を持ち、ツカくと出て舞臺へ來り
 ハッ、御用とござりまするゆゑ、燕郡平、早速これまで……いかなる御用か存せねど、堪忍五

兩三人扶持、三人前は御容赦なく、仰せつけられ下さりませう。

ト平伏する。

光遠 その老ほれめを叩き歸せ。

郡平 サア、親仁め、立たう。

洞九 ハテ、立たうと云はないでも立つてる。和泉式部は、おれが娘だから逢ひに來たを、ほい歸せとは、不孝者めが。

柳生 まだ吐かすか。奥様の親御は、大江の雅宗さま、お果てなされてこの世にない。

置霜 又ぞろ親と申すのは。

郡平 紛れ者めが。下がれく。

ト棒にて追ひ歸さうとする。

和泉 郡平とやら、待ちや。

郡平 でも、横道者のこの親仁め。

和泉 イヤ、此方も、心覚えのある、あの者の詞、仔細聞いての上の事……コリヤ老人、自らが親と云ふは、様子があらう、仔細を申しや。

洞九 云はないでどうするものか。有たけこたけ、まくしかけて

三五四

ト和泉式部が側へ行き

イヤ、口で云はうより、式部、これ覚えがあるか。

ト珠數袋と、色紙の片割れを出す。和泉式部、不思議さうに取つて見て

和泉 『子を思ふ、親の心のわりなさは』……この珠數入れにも覚えがある。

ト懐より同じ裂れの守り袋と、色紙の片々を出し

自らが持つてゐる、錦欄の裂れと同じ珠數袋。殊に歌の上の句……「唐も大和も變らざりけり」。

洞九 なんと、どうぢやく。

和泉 お過ぎなされた父上、雅宗さまの自らは、藁の上よりこの守りに、色紙の下の句を添へて捨子。

我れなき跡もこれを證據に、めぐり逢うたら不孝にすなと、末期の教訓……この上の句を持つてゐる老人。そんならわしが。

洞九 親ぢやわい。

和泉 すりや、お前の娘でござんしたか。

洞九 なつかしかつたわやい。

ト空泣きする。

郡平 そんなら、鹿小屋の番見るやうなこの親仁が、奥様の實の親か。

光遠 ハテ、人の素性は知れぬものぢやなア。

洞九 サア、名乗り合つた上からは……娘、保昌と縁切つて、髭黒公へ行つてくれ。

和泉 エ。

洞九 サア、われはそんな結構な形をして居れど、實の親は矢橋の船頭、食ふや食はずで瀆年貢のたまり。アレ、本堂へは庄屋まで連れで来た。髭黒さまへ行つてたも。

和泉 イエ、なんほ實の父上でも、今は保昌といふ定まる夫ある身。

柳生 金銀の望みなれば、いか程なりとも。

和泉 縁切る事は成りませぬ。

洞九 イヤ、安請合ひに金銀の事云うても、髭黒まと保昌とは、身分の貫目が違ふ。四の五といへば、マア金になりさうな、この箱から取上げてこませ。

ト蒔繪の箱を取らうとする。

三五五

四天王 碁碁

大南北全集

和泉ア、コレく、こりや大切な和歌三神の掛け地。

ト隠す。

洞九 無理云はるゝが否なら、髭黒さまへ行くか。

和泉 サ、それは。

洞九 保昌と縁切るか。

和泉 サア。

洞九 サアくく。こゝな不孝者めが。

和泉 ハイ。

ト思ひ入れ。

洞九 いつその事に、親が折檻。

ト立ちかゝるを郡平、ありあふ縫ひぐるみにて、洞九郎をしたゝかに打ち据ゑる。

ヤイく、この二本棒め。なぜ奥方の親御様を。

郡平 親御もすさまじい。こゝな大騙りめ。

洞九 なんと。

郡平 互ひに名乗る證據の品玉、どこでもよろまかして来て、今のやうな御託をほざく。

洞九 此奴、さまざまな事を吐かす。この珠数袋と證據の色紙は、おれがあれに遣つた片割れ。わりや又、なんでおれを

光遠 騙りと申すに證據があるか。

ト郡平、懐ろより一通の破れを出し

郡平 奥様、これ御覽下さりませう。

ト和泉式部取つて

和泉 「ちよつと申し入れ候ふ、髭黒公御執心の和泉式部は、敦賀の群司爲時が實子、水子のうち捨てたるよし、證據はこの珠数袋、色紙の片割れ」

洞九 ヤア、それを。

ト引ツたくるを郡平もぎ取り、引据ゑて片手にひろげ

郡平 「今日この儀嘆ぎ出し、即ちその證據を持たせ、親と偽はり、保昌と縁切らせ、左大臣のお望み叶ひ候ふ手段いたし候ふ間、御安堵なさるべく候ふ」

和泉 すりや、自らの實の親は、敦賀の郡司爲時で

光遠 その老ほれめは
女兩 騙りであつたか。
洞九 モウこりや堪らぬ。

郡平 おのれ、かゝる企みを仕出す奴、叩いて見たら又外に、いかなる舊惡。拷問かける、動くまいぞ

ト逃げ出すを、郡平取つて押へ、下げ緒にて縛しあげ
ト引据ゑる。この時下座より與茂八出かゝり、ツカくと出て

與茂 ア、モシ、その御立腹は、御尤もでござります。コレ、洞九郎、その面は何だ、大方こんな事であらうと思つた。平常酒ばかり飲んで、稼業を疎かにするゆる、ツイこんな悪い氣も出る……ヘイ、申しあげます。私は矢橋浦の庄屋、この者は私しが支配、平常は猫のやうな惡氣のない親仁でござります。ツイ惡者に騙され、出來心でござります。舊惡の悪い事は私しが證人。どうぞお慈悲をお願ひ申しあげます。

郡平 イヤ、庄屋、なんほ其方が願ひでも、この老ほれは
和泉 イヤ待ちや。郡平とやら、彼れが願ひといひ、事を糺さばこの身の素性、世間へ流布して夫まで名の出る事、慈悲は上からとやら、穩便に取計らや。

郡平 ハツ、エ、コレ、この場で拷問したい奴だが、奥方の仰せつけ、命は助けて叩き拂ひ。それまで
繩つき、庄屋に預ける。

與茂 エ、有り難うござりまする。

和泉 柳生七郎、暫し彼れらは、庫裡の供部屋へ。

柳生 押籠め置くでござりませう。

置霜 わたし等も、奥様のお支度

冬野 お臺所で何かの用意。

柳生 庄屋、彼れめを引ッ立てい。

與茂 サア、洞九郎、悪い事をする、いつでも斯うだ。アレ、天道様が見てござるワ。

洞九 すりや、あの罰で。

與茂 縛られたワ。

ト洞九郎、上をキツト見て

洞九 天道、覺えてうせろ。

ト管絃になり、洞九郎が繩を與茂八取り、置露冬野に柳生七郎附いて下座へ入る。和泉式部二品を纏

和泉 これを證據に騙りに來るとは、油斷のならぬ世の中ぢやなア。

光遠 それも無難に濟みましたは、足輕、そちや、いよく平井家の。

郡平 保昌さまのお足輕、轟郡平、一昨夜遂電いたした、人代りに雇はれて参りました、二代目の郡平でござります。

和泉 すりや、人代りに参つた新参者にしては、只今の働らき、取立て使うたら、天晴れな骨柄。

郡平 イヤ、さのみ御用には立ちますまいが、長らくお屋敷に足を留め、御奉公がなりませうか。

和泉 ならいでかいなう。頼光公の御家臣、貞光どのは碓井の山賤も、今は歴々。其方も今の様子では

……イヤ、様子と云へば今の状、今一度、跡の方を聞かしてたも。

郡平 ハイ。今の状ナ

トまた出して

「左大臣のお望み叶ひ候ふ手段いたし候ふ間、御安堵なさるべく候ふ」……残念ながら、宛名は破れてござりません。

和泉 ほんに、よい手蹟ぢやに惜しい事。取らんと企むお家流、憂き目に大橋流ではないかいの。

郡平 イエ、これは些細ないろは假名、お名にかゝはる大師様ではござりませぬ。

和泉 イ、ヤ、この身の上田流……これを手本に習うたかいの。

ト千切れし文を出す。

郡平 「光遠どのへ、正盛」

光遠 なんと。

トぎよつと思ひ入れ。

和泉 引裂く片しのこの名宛。

郡平 さては昨夜、粟田口で。

和泉 そほふる雨の暗まぎれ

郡平 迎ひの小者が手ざはりの

和泉 桐油も赤き、その場の血汐。

郡平 すりや、その時の

和泉 曲者は

郡平 イ、ヤ、わしではござりませぬ。この一通は拾ひ物。

光遠 胡亂な宛名。

和泉 宛名が揃へば、その一通。

ト光遠は和泉式部が宛名の所を取らうとする。立廻りよろしく、状を奪ふ。よき程に風の音になり、この状を空へ巻きあげる。

光遠 ヤ、大事の密書を

三人 辻風に。

ト向うをキツト見る。六部の合ひ方、時の鐘の拍子にて、向うより當山、剃立て、世話六部、今の密書を読みながら出てくる。光遠、これを見て、郡平にキツと目くばせする。此うち當山、花道中ほどまで来る。郡平、ツカくと當山が側へ行き、一通へ手をかける。當山突き廻し、ちよつと立廻りあつて

當山 こりや、何となさるゝ。

郡平 イヤサ、その一通を

當山 イヤ、こりや只今御門前で、拾うた書き物。

和泉 大事の密書。修行者、此方へ。

郡平 イ、ヤ、身共へ。

トまた手をかけるを突きのけ

當山 争ふ物は六部めが、天から授かる拾ひ物、どちらへどうとの御返事は、それへ參つて申し上げう

ト右の合ひ方にて、當山、舞臺へ来る。

光遠 修行者、その書き物、身共へ渡しやれ。

當山 ハ、、、、愚僧が持つては、反古同然のこの書き物。三方から争ふは、よくく欲しいと見え

たこの状

郡平 路用の足しならいくらでも。

和泉 褒美をやらうが

光遠 くれまいか。

ト當山、笈を下ろし

當山 褒美とあるからは、はした錢ではござりますまい。ドレ、お三人へ上げませうか。

トすたくに引裂く。

和泉 ヤア、科を糺すその密書を

當山 ハテ、どこの奥様か存じませぬが、そりやお心の狭い。好事門を出でず、悪事千里、天の咎め
来るを待つて、お糺しなさい。

和泉 流石は修行者。

光遠 慾を離れしこの場の納まり。

郡平 よく佛法の染みこんだ、廻國とは頼もしい。

當山 イヤモシ、その佛法大嫌ひ。抹香臭いは、否な事く。

郡平 イヤモシ、然らば、何か、武術を試す、武者修行といふやうな事か。

當山 二才の時に、その武者修行にも二三度出たが、怖い目にあはねば、あんまり面白いものでもござ
りませぬ。

和泉 して又、何が望みでその姿に。

當山 百姓は知らず、匹夫は否、主取りせうにもはした知行。名馬あつても伯樂なければ、世を見限つ
て、せう事なしの、でも六部サ。

郡平 ムウ、先刻からの詞の端、人もなけなる廣言。わりや大分味噌をあけるが、小身ながらも身も侍
ひ、なりや耳にさはる、それは格別、先づ聞かうは、その自慢の武術の流儀は。

當山 一口に云へば、八宗兼學サ。

郡平 面白い。斯う差しこむ、柔術は何流。

トかゝる。

當山 子供も知つた竹の内サ。

ト振りほどく。郡平急いで

郡平 斯う打ちこめば。

ト縫ひぐるみにて打つてかゝる。當山油扇にて請けとめ

當山 一刀流の合打ち。

ト立廻りに當山、扇にて縫ひぐるみを叩き落す。これを見て光遠も急きこみ

光遠 郡平手ぬるい。眞剣で勝負せい。

郡平 眞剣なれば

ト刀を抜かすとするを和泉式部、中へ入つてその手を留め

和泉 イヤ、眞剣でなうても、手並は見えた、郡平の不覺。

郡平 ナニ、身共の不覺とは、

和泉 サア、いま武術を試すうち、あの修行者が打出す手裡劍、郡平、其方が胸許を

郡平 エ。
光遠 イカサマ、衣紋を縫ひ合せしは

當山 旅の用意の、なまくら刺刀サ。
和泉 誠に打つたら鈍くとも、其方が命はあるまいがや。

郡平 サ、それは。
和泉 サアくく、不覺の郡平、暇をくれたぞ。

郡平 すりや、拙者めに
和泉 氣の許されぬ家來なら、早う見切るが主の習ひ。

光遠 暇の出た奉公人、正盛どのへ推舉いたさう。
郡平 アノ拙者を。

光遠 いかにも。今までつれない古主へ面あて。槍一本の主は請合ひ。
當山 とんだ事から怪我の高名、ハテ、人の果報は知れぬものだ。

和泉 イヤ、その身も望みあらば

當山 お目鏡次第で仕官の望み。

和泉 それも返事は後までに
光遠 身共は一まづ方丈へ

郡平 主取りしかへた喜び酒。
和泉 肴を取らせう。

郡平 こりや密書の名宛。
和泉 請け状を戻したぞ。

當山 ハテ、寛仁大度。

和泉 修行者
當山 奥様

郡平 ムウ。

當山 ドリヤ、本堂へ詣つて來ようか。
ト和泉式部にかゝるを、當山、隔てながら

ト唄になり、光遠、郡平、當山、思ひ入れあつて下座へ入る。和泉式部見送り、思ひ入れ。直ぐにバタバタにて、向うより御手洗、白き腰帯を締めて來り、舞臺へ來る。

和泉 其方は二の瀬が妹、御手洗ではないか、

御手 和泉式部さま。

和泉 どうして爰へ。

御手 サア、昨日祇園の御社へ、神事の役にて参りしところ、不思議に手に入るこの一品。

ト旗を出す。和泉式部取つて

和泉 こりやコレ、先年東にて、謀叛を起せし將門が、家に傳はる繋ぎ馬の旗。

御手 サア、御内意ありし御正印、紛失の、その盜賊の手が、りもと、あなたにお渡し申したさ、人

目を忍びこの所まで

和泉 オ、出かしやつた。この石山の詠歌の間に、一七日の通夜といふも、誠は紛失の御正印、その手が、りにもと、夜になればいろくと、姿をやつすも詮議の爲、一つには、早う在所の知れるやうに、コレ、この箱は、和歌三神の掛け地とは偽り、源家の重寶蜘蛛切の一腰、頼信公の形代となし、祈念の爲に持参なせば、争はれぬ寶の威徳。劍は陽を司れば、その氣發してあの如く

櫻の返り咲き。人の目角を防がんと、あらざらんこの世の外のおもひ出に、いま一度の逢ふ事もがな……この詠歌の徳と流布させ、心のうちでは御正印の祈願、あらざらんこの世の外とは、この身をかけてその品を、いま一度返させ給へと、千々に心を碎き、式部が心の苦しさを、推量してたもひなう。

御手 お道理でござりまする。して、その持参いたしました品は、

和泉 御正印の盜賊、殘黨ばらが業も知れねば、この旗を鎮守の社におさめ、呪詛なさば、それと聞き出す便りもあらん。

御手 左様なれば私しは

和泉 暫しの間、蜘蛛切を預くれば、源氏の間にて守護してたも、

御手 して、あなた様は、

和泉 鎮守の社へこの旗を納め、盜賊呪詛の祈誓をなさん。

御手 左様なれば式部さま

和泉 必ずその品、大切に、

ト唄、暮れ六つの鐘にて、和泉式部、旗を持ち、下座へ入る。

御手 式部さまの仰せつけられ、大切なこの一品、あの源氏の間で……さうぢや。

三七〇

ト二重へ上がらうとする。下座より光遠出て来り、後より抱きつく。

ア、コレ、誰れぢや、悪い事。

光遠 イヤ、おれぢや、大宅ぢや。

御手 こりや太郎さま、なんとなされます。

光遠 なんとするのは御手洗、酷いぞよ。日頃惚れて口説けども、びんしゃんして刎ねつける。幸ひの今日の首尾、殊にちくらで黒白も知れぬワ。戀の叶ふ瑞相ぢや。

トしなだれる。

御手 ア、コレ、滅相な。わたしや式部さまに、大切な御用仰せつけられ、そんなどころぢやござんせぬ。

ト振り切る。此うち郡平出で、蜘蛛切の一腰をソツと取り、中の刀の身を出し、我が刀と入れ替へる

光遠、これを知らせまいとして

光遠 コレ、さう酷く云はぬものだ。おぬしだといつて、木竹ではあるまいし。少しは情を知らぬかえ
ト此うち郡平、刀を入れ替へ、箱を元の所へ直す。

御手 エ、モウ、そんな事は存じませぬわいな。

光遠 これサ、さう酷くは云はぬものぢや。

トまた抱きつく。郡平、中を押分け

郡平 こりや光遠さま。

光遠 そちや郡平。

御手 アタ嫌らしい。お嗜みなされませいなア。

ト管絃になり、御手洗、刀の箱を持ち、下座へ入る。

光遠 郡平。御手洗めを口説くうち

郡平 まんまと太刀の身を入れかへ、拙者が刀へ。

光遠 出かした。この上は本堂にて、申せし如く

郡平 いやよく正盛公へ

光遠 推舉は身共、詠歌の爲に通夜なすといふ式部が所存、合點がゆかぬ。

郡平 其許様に成り代り、跡に残つて實否は拙者が。

光遠 幸ひ當寺は身共が菩提所。某が名代と、一宿なして何かの儀を

三七一

郡平 嗅ぎ出して、早速注進。

光遠 然らば身共は

郡平 拙者に任せて

光遠 罷り歸る。

郡平 光遠さま

光遠 必ず、ぬかるな。

トこんくにて光遠向うへ、郡平下座へ入る。上方より洞九郎、以前の旗を盗み持ち、下手より與茂八、泥坊の形になり、窺ひ出て来り、双方に行き當り、顔見合せ

洞九 獺の隠藏。

與茂 泥龜の洞九郎

洞九 お頭伊賀壽どの、この石山によい仕事があるゆゑ、案内せいと指圖に幸ひ、祇園で頼まれた今日の仕事。手目上げられても、これからが又一仕事。

與茂 門々締めて寝入り端、忍び込まする手筈はな。

洞九 裏門の大門、海老鉾を焼き切るが、盗人一式の道具。

ト以前の藁苞より、大鋸、金鋸、釘抜きなど出してやる。

與茂 すりや、これで門をこぢあけ

洞九 いつも通りの通り、合圖を定め

與茂 お頭はじめ引入れん。

洞九 この洞九郎は跡に残り、又なんぞ小仕事を

與茂 必ず覺られぬやうに

洞九 合ひ詞は

與茂 雨

洞九 雪。

與茂 それよ。

ト向うへ走り入る。洞九郎残り、以前の旗を出し

洞九 和泉式部めが、鎮守の宮へ、隠して置いた繋ぎ馬の旗、人知れずひん盗んで来たも金の蔓。

トそこにある藁苞へ押しこみ、持つて行かうとする。後へ御手洗出で来り、洞九郎を捕へ御手待つた。今その中へ隠したは、何か怪しい。爰へ出しや。

洞九 イ、ヤ、何も女の咎める物ではない。どかつしやれ。
御手 改めぬうちは動かせぬ。
洞九 エ、面倒な。

トちよつと立廻り。早めたる双盤になり、洞九郎、御手洗を當て、藁菴を持つて一散に向うへ走り入る。御手洗上がり、同じく跡を追うて走り入る。御簾の中にて

郡平 式部、その詞、無禮であらう。
式部 なんと。

ト管絃にて、御簾上がる。内に郡平。和泉式部、詰め寄り居る。左右に燭臺ともしある。

郡平 最前暇の出るや否、光遠どの、推舉にて、正盛公へ仕官にありつく上からは、今までの足輕郡平ではない。身を賤しめるは、失禮ではあるまいか。

式部 すりや、光遠さまのお執持ちで、正盛公へ

郡平 即ち今宵残り居るも、光遠どの、内意あつて、源氏の間へ伺候いたした。式部どの、いよくこなたの七日の通夜は

式部 最前も申す通り

郡平 詠歌の祈願か。

和泉 いかにも左やう。

郡平 ハテナア。

ト思ひ入れ。バタ／＼にて、下座より西念、愆念、同宿の形にて、兩人とも縛られ、うるたへ、あちこち引かれながら出て来る。

愆念 西念坊

西念 愆念坊

兩人 こりやマア、どうせう／＼。

トうる／＼する。

郡平 ヤア／＼、坊主ども。何を騒ぐ。

愆念 ヤア、式部さま、これにお出でなされまするか。

西念 大變でござりまする。とんちきでござりまする。一大事でござりまする。

和泉 一大事とは。

愆念 夜に入りますると、兩方の門を締め、厳しく用心いたしますところに、いかなる事にや裏門を開

き、大勢の盗人が込み入り

西念 方丈はじめ長老納所、私しどもまで縛りめけ、只今本堂に屯ろいたして居ります。

慾念 私しども兩人は、やうく逃けて参りました。

西念 どうぞお師匠様を助けたうござります。まづ、私しどもから先へ、助かりたうござります。

ト引ッ張る。

慾念 ヤイ、臆病坊主め、見下け果てた。愚僧はそんな弱い音は出さぬ。裏門へ逃けるワ。

ト西念を引ッ張る。

西念 ハテ、逃げ勝手は表門がよいワ。

ト此方へ引ッ張る。

慾念 イヤ、坊主は裏門が當り前、愚圖々々せずと此方へ逃ける。

ト兩人引ッ張り合ひながら、向うへ逃げて入る。

和泉 ハテ、思ひもよらぬ今宵の盗賊、大勢を以て入り込みしは、安からぬ一大事。かゝる事もあらんかと、和歌三神の像と名け、申し下ろして持参なせし、源家の重代蜘蛛切丸。

ト箱の中より一腰を出して身づくろふ。

郡平 すりや、それが源氏の重寶、蜘蛛切とな。

和泉 いかにも。

郡平 ハテナア。

ト舌を出してせ、ら笑ふ。

和泉 元は大内の官女なれど、今は保昌といふ武官の妻。本堂に屯ろするとは、人も無けなる盗賊ども自らが行き向つて

ト行かうとする。此うち下座より當山、出かゝり居て

當山 アイヤ、奥方しばらく。

和泉 そちや最前の修行者。

當山 聖人は危ふきに近寄らず、女儀として、たとへ搦め捕つたりとも、人でなしの盗賊ども、さのみお手柄にもなりますまい。この儀は餘人に。

和泉 尤も正盛に仕官といひ、光遠さまの菩提所、いづれ遁れぬ郡平どの、お手柄拜見いたしたい。

郡平 ヤア、すりやアノ、盗賊の討手に

當山 武術鍛錬のこなた。こりや二の足は踏まれまい。

郡平 ア、コレ、尻込みするではないが、まだ主人へ目見得さへ濟まぬうちに
和泉 盜賊の討手は成りませぬか。ハテ、是非に及ばぬ。ア、この討手は誰れをがな。
當山 拙者が仰せを蒙むりませう。

和泉 すりや、其方が

當山 最前の約束通り、爰ぞ拙者が一つの功。

和泉 ムウ、最前の手柄は見て置いた。手柄次第で望みの立身。

當山 もし手に餘らば

和泉 勝手次第に切り捨て、

當山 修行者の悲しさ、切るべき刃物が

和泉 成る程、尤も。郡平どの、其許の刀、暫し彼れめに

光遠 エ、。

ト悔り。
成る程、この刀を貸してやれとか。

當山 その一腰拜借いたせば、あなたも捕り手に向ふも同然。

郡平 イヤサ、これには大切な

和泉 サア、大切な捕り物。然らばこなたがお向ひなさるか。

郡平 サ、それは。

和泉 サア、惜します刀をお貸しなされい。

ト郡平の刀を無理に取り、當山へ渡す。

當山 エ、忝ない。この一腰ある上は

和泉 ちつとも早く

當山 盜賊めを

郡平 仕損ずると免さぬぞ。

當山 御念に及ばぬ。

和泉 お行きやれ。

當山 ハツ。

郡平 ムウ。

ト當山にかゝらうとする。和泉式部隔てる。双盤にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、本堂、向う佛前の飾り付け、前面へ打敷、花立、香爐、佛器、うしろ戸張り。この二重に伊賀壽太郎、誂らへの盜賊の拵らへ、經机に腰をかけ、護摩の火鉢に護摩木を焚き、二升徳利の尻をくべながら、沖六、利助、ほん八、及び前の與茂八の闇藏、いづれも手下にて、車座に取巻きあたりある。時の鐘にて道具とまる。

四人 お頭、サア〜、あたりつしやりませ〜。

壽太 顔見世の出づらに、當れとは耳寄り。わい等もゆつくり暖まつて、働らけ〜。

沖六 暖まるはよいが、頭、あんまり

四人 落ちつき過ぎませうぞえ。

壽太 べら坊め、さうビク〜怖がつて、盗人がなるものか。坊主めらは、残らず縛しあけて猿繋ぎ。氣遣ひせすと、爛がよいか、見ろ。

闇藏 合點でござんす。

オ、丁度ようござんす。茶碗の代りに、佛器で始めなさい〜。

ト佛器を取つて来て、壽太郎についてやる。
ト杖から竹の皮包みを出す。
利助 こんな事もあらうかと、宵に瀬田の居酒屋で、焼かして来た蜻の足。

ほん こりやア出来た、お頭、肴はえ。

壽太 木鼠めが、掴みちらした物が、食へるものか。

沖六 ソレ、水ッ漬が落ちるワ。穢ない。

利助 イヤ、これで鹽あんばいをするのだ。

ほん おきやアがれ。時に頭、お前も、わし等も船の上の働らき、ところに、この頃、この都近くで陸働らき。

四人 どういふ心でござんすえ。

壽太 ハテ、役にも立たぬ根問ひ。人の物を我が物に、船の陸があるものか。目にかゝつたが百年目だ。

四人 有りつたけに搔ッ浚ッて

壽太 イヤ、今宵ばかりは、金銀雜物を目がけるな。

四人して、何を盗むのでござんす。

壽太 さればよ。保昌が妻の和泉式部、この石山に通夜するは、源家重代蜘蛛切の二腰を持参なし、頼信が形代として、祈念するといふ事、嗅ぎ出したは、時ならぬ櫻の返り咲き。

ほん すりや、その名剣を

壽太 式部がうせるは源氏の間、同宿めらに案内させ、奪ひ取つて女めは
四人 いつもの通り弄みもの。

壽太 ドレ、もう一杯氣を付けて。

トこれにて皆々酒を飲み

闇藏 それはさうと、おいらを手引きした、あの洞九郎は、どうしたしらん。

利助 彼奴が居たら、何ぞ工面ささうもの。

四人 精進物も無い酒盛り。

壽太 ア、コレ、何ぞ好い者が。

トまた一つ受ける。この時、バツタリと音して、前づらの打敷の下より、壽太郎が鼻の先へ、足をづつと突き出す。皆々恟り。壽太郎、思ひ入れあつて、平舞臺へ下りる。皆々も下りる。

沖六 ヤア、お頭が肴といふ、鼻の先へ

四人 足を出したは。

壽太 引摺り出せ。

ト四人一度にツカ〜と行き、打敷の下より當山を引摺り出す。當山、細く疊んだ紙帳を抱へ、伸びをしながら出て来り

當山 旅疲れにグツスリやつて、うまい夢を見るどうぶくら、こりやア何とさつしやる。

沖六 イヤ、何ともしないが、われはマア

四人 何者だ。

當山 わしかえ、わしやア六部でござりますが……斯う見たところがお前方ば、お寺の衆とも見えぬが、ハ、ア、これは觀音様へお籠りの信者衆か……さうでござりませう〜。わしもこの本堂へ籠つて、野宿ならこの紙帳を吊つて寝ますが、打敷の下は風も通さず、ツイとろ〜したが、見れば結構な焚火、先刻からわしも、暖らせて下さればよいに。

壽太 ムウ、すりや、いよくこの所に通夜して

當山 枯れたる木にも花咲くと

壽太 大慈の誓ひを願はんと

當山 慾にも耽る現當二世。

壽太 救ひ取らるゝ

當山 天の網サ。

壽太 なんと。

當山 降魔の利劍、奥の縁、この修行者が搦め捕る。盜賊めら、腕廻せ。

ト細さばきする。

四人 さう云や、おのれを

ト四人打つてかゝる。當山、紙帳の中より以前の一腰を出し、見事に四人を切り倒す。壽太郎いらつて抜いて切りかける。兩人よろしく見得。ドロ〜にて當山の劍へ、誂らへの蜘蛛現はれて這ひまふ。兩人これに目をつけ、キツとなる。誂らへの合ひ方、ドロ〜。

當山 ハテ、心得ぬ。今この一腰抜き放せば、いづくともなく數多の蜘蛛、刀を渡つて守護する風情。壽太 傳へ聞く、源家の重寶、蜘蛛切の一腰は、その以前髭切と云ひしを、頼光土蜘蛛を切つて、障化を除く時より、精魂刃にとまつて

當山 蜘蛛現はるゝを以て

壽太 髭切を蜘蛛切と呼ぶとかや。

當山 さては我が預かりしこの一腰は

壽太 正しく源家の

當山 蜘蛛切なるか。

壽太 何にもせよ

當山 希代な劍も

兩人 あるものぢやなア。

ト當山、白刃を納める。蜘蛛消え、ドロ〜やむ。

當山 この不思議を見る上は、この一腰こそ源家の重寶、名も無き劍に隠し置きしか、不思議にも我が手に入るは、我が望み叶ふしるし、忝い。

ト行きにかゝる。

壽太 待て、修行者。コリヤ、盜賊を搦めぬか。

當山 ヤ。

壽太 イヤサ、手下の者を打放した手の内、なか／＼只の六部ではあるまい。殊に蜘蛛切の一腰と聞いては、只は遣られぬ。行きたくば冥土へ行けサ。

當山 ムウ。尤も。

ト詭らへの合ひ方。當山思ひ入れあつて、壽太郎が側へにじり寄り

成る程、其方が推量の通り、仔細ある修行者。いさゝか望みある故に、今宵の盜賊搦め役を乞ひ請け、それを功に源家へ便らんと思ひしが、この劍手に入つて、望み足んぬる上からは、見かけ

て頼む、なんと見遁してはくれまいか。

壽太 ム、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。盜賊に見遁してくれとは、あちらこちらで面白い。いかにも目を眠つてやるまいものでもないが、して、世を忍ぶその實名は。

ト當山、壽太郎をキツと見て

當山 盜賊ながら天晴れの骨柄、義を破るべき器ならねば、包まずこの身を明かし申さん。まこと某は關八州に威を振ひし、將門が長臣、六郎公連が成れの果。

壽太 さては聞き及ぶ、六郎公連であつたか。

當山 斯く世を忍ぶも主君の公達、良門どの、行くへを尋ね、世に立てんには屈竟なるこの劍。約束通

り、見遁し頼む。

ト行かうとするを引とめ、壽太郎 懐より、錦の袋に入れし立て文を出し、當山を打ち据ゑる。

こりや某を、何ゆゑに。

壽太 六郎公連の不忠者め。

當山 なんと。

壽太 將門公は忝くも、桓武の後胤として、王位を望む相馬の旗揚げ。軍議の折柄、人も伏せぬ其方が諫言、不吉となつて一門滅亡。

當山 サ、それは。

壽太 不忠の折檻、カウ／＼。

ト打ち据ゑる。その手をしかと取つて

當山 幸先を挫きし公連が諫言、忠に似て忠にあらずと、一言半句云ひ譯なけれど……合點のゆかぬはその荒まし、よつく知つたる其方は。

壽太 伊豫の椽純友が、股肱と頼みし伊賀壽太郎。

當山 すりや、成信であつたか。

壽太 意見の答は、平親王の給旨。

當山 すりや、御主君將門公の

壽太 包みし錦は

當山 大内裂れ。

壽太 取りも直さず吾妻の内裡。

當山 ドレ。

ト詔への鳴り物になり、綸旨をキツと見て

思ひ出せば承平の初め、御主君小次郎將門公、その身桓武の正統にて、王位を踏まざる無念とあ

つて

壽太 謀叛の與力は伊豫の純友、合體なして四國へ下る。將門は東國にて、吾妻内裡のその結構。

當山 平の國香を初めとして、關八州を打靡かせ、既に都を襲はんと、東國西國切り從へ

壽太 その勢、破竹の勢ひも

當山 官軍の計策に

壽太 相馬の内裡も

當山 四國の一揆も

壽太 亡びて残るは

當山 公連がた。

壽太 我れ盜賊の業を爲すも、軍川金を集め、再び古王を立てん爲め、奪ひ取つたる御正印。

當山 我れも一つの功を立て、良門公へ詫びせん存念

ト此うち後へ柳生七郎、股立ち、袴の形にて、十手を持ち、窺ひあて

柳生 さては修行者といつたは、六郎公連。腕廻せ。

ト當山にかゝる。ちよつと立廻り。柳生七郎、十手を半鐘へ打ちつける。エンと鐘鳴る。これを合圖

に早太鼓、拍子木、方々にて打ち立てる。

壽太 ヤア、あの物音は

ト綸旨を懐中する。

柳生 時刻うつるに心得ず、まッかうあらば告げ知らせと、合圖の鐘ともろともに、當寺を取巻く組子

の手配り。

當山 すりや、落ち行く事も叶はぬか。

柳生 公連、覺悟。

三九〇

ト切つてかゝる。その刀を引ツたくり、柳生を引敷き、直ぐにその刀を、腹へ突立てる。合ひ方。

壽太 ヤア、こりや何ゆゑに。
當山 ハテ、計り事は密なるをよしとする。貴殿、某、一方を切り抜け、立退かんは易けれど、さすれば實名悟り知れて、用意なさは大義の妨げ……今宵の盜賊まツこの如く手疵負はせ、一腰奪ひ立去りしと、源氏方を欺むかん。成信どのにはこの名劍、良門どのにめぐり逢ひ、手渡しなして合體なし、大義の荷擔人、死後の頼み。

ト以前の劍を壽太郎へ渡す。

壽太 その計略さる事ながら、惜しき武士、早まつて。

當山 イヤ、さに非ず、この生害もこの身の越度。善惡ともに主君に従ふ臣下の習ひ、その辨まへなく我れ一人、いらざる意見に御不興うけ、他國のうちに自家の滅亡。よく思へば旗揚げの、不吉を申せしこの身の後悔。この生害も冥土なる、將門公へ申し譯。

壽太 事を分けたるその詞、云ひ置く一々、承知いたした。

當山 一刻も早くこの所を

壽太 かねて聞いたる抜け井戸より、遁れ去つて良門に

當山 對面なさば

壽太 蜘蛛切丸は手渡しせん。

柳生 その劍を

ト勿ね返してかゝる。壽太郎、襟を捕へ

壽太 六郎公連。

當山 大義の吉左右。

ト柳生またかゝるを、壽太郎、ボンと切り倒し

壽太 未來で待ちやれ。

ト兩人よろしき見得、時の鐘にて道具まはる。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、正面黒木の鳥居、杉並木、所々に石燈籠、稻村。下の方に誂らへの掛け稻。日覆より杉の吊り枝。真中に結構なる御所車。前に誂らへの牛、寝て居る。土手板、誂らへあり、櫓の森と記した石の傍示杓。爰に御手洗、洞九郎を引留めて居る。山嵐しにて道具とまる。

三九一

四天王 櫓礎

大南北全集

洞九 女め、執念深く、どこまで付きまとうて邪魔をする。
御手 邪魔せいでならうか。その蘘苞へ隠したは、奥様へ差上げた相馬の旗、此方へ戻しや。
洞九 さう知られたら隠すに及ばぬ。成る程、これは相馬の旗だ。
御手 さてこそな。

洞九 かねて聞くこの旗には、亂軍の砌り、將門最期の血汐染まり、雨夜には必ず陰火燃ゆると聞きしが、どうしてわれが手に入つた。

御手 その仔細聞かうより、キリ／＼此方へ渡すまいか。

洞九 たつて吐かせば、踏み殺すが、退くまいか。

御手 渡しや。

兩人 どつこい。

トこれより詭らへの鳴り物にて、蘘苞の中より以前の旗を出し、争つて、此うち御手洗が扱帯解けて旗と間違ふ仕組みよろしく、ト誠の旗は土手板の上にかゝり、兩人は扱帯を引合ひ、中より引裂き互ひに取つたる心にて、雨花道へツカ／＼と行き、ホツと吐息。ゴン／＼にて兩人は走り入る。鳴り物シヤンとやむ。雨車、薄ドロ／＼にて、この旗の上へ陰火燃える。正面の牛を持ちあげ、中より鬼

同丸出てキツと見符。詭らへの鳴り物になり、バツタリと音して下手の稻村より、頼光、百如の形、鉄を持ち出る。御所車より粧姫、扇を持ち、陰火に目を附ける。これにて鬼同丸、また牛をかむり、手を出して旗を引込む。陰火消え、ドロ／＼やむ。頼光怪しみ、ツカ／＼と来て牛へかゝる。牛を刎れのけ、鬼同丸、詭らへの形にて、抜刀を持ち、頼光へ切つてかゝる。三人面白き間の立廻り、よき程に鳴り物になり、この立廻りに頼光、懐中より詭らへの襖紗を落す。粧姫、これを拾ひ、取上げる。鬼同丸、頼光へ切りかけ、既に危ふくなる。粧姫、中を押し分ける事。ドロ／＼にて鬼同丸を見事に下へ打ちつける。鬼同丸、粧姫が落したる扇を拾ふ。粧姫が身内より光さす。頼光、粧姫、顔見合せ。ひつたりと寄添ふ。鬼同丸、粧姫を見上げ、ギョツと思ひ入れ。この仕組み、よろしく、ひやうし

幕

第一番目 四建目

香堂前切り見世の場

役名——切り見世女郎、お兼。同、お松。部屋頭、伴右衛門。路地番、次郎。上條兵太。地廻り。八。同、鐵。同、龜。肴賣り、三田の源六。切り見世女郎、三日月お仙。

本舞臺、三間の間。一間々口の見世三間、三尺の引戸。軒毎に火の用心の行燈。上の見世にお兼、女郎の拵らへ、箕盆を扣へてゐる。下の見世にお松、同じく女郎にて、髪を直してゐる。中の見世は引戸閉つてあり、すべて京和香堂前の切り見世。さんげくの合ひ方にて幕明く。
ト下座と花道より仕出し大勢、口々にそり節を唄ひ、摺れ違つて入る。この中へ次郎、下馬の上へ絆纏、股引、路地番の捨ぜりふにて、鐵棒を曳き、下座より出て花道へ入る。

かね カウく、町人さん、寄んねえヨウ。

まつ カウく、侍ひさん、寄んねえ。見たやうだによ。

ト呼びこむ。仕出しは別れて入る。右の合ひ方にて花道より、八、龜、鐵、地廻り、ひとへ帯の形、下駄がけ、頬かむりに出て來り、見世へ寄り

八 どうだ、お兼ばう。

かね カウ、八さん、いゝ加減に廻んねえ。下駄の齒が減らうと氣の毒だよ。

鐵 下駄が減つたら、誰れぞが買つてくれやう。ナア、お松ばう。

まつ お前には、お勝さんが買つてやらうと云つたよ。

八 打つちやつて置いてくんねえ。ナア鐵公。

まつ なんだ、鐵さん、下駄の工面も出来やアしめえ。

龜 工面が出来にやア、日濟しを借りるワ。おへねえ猿唐人だ。

まつ ア、わつちやア猿唐人サ。

かね コレナ、この子は又口舌か。八さんが聞いてゐるよ。

まつ 氣紛れの鞘當が見たいよ。

八 なんだ、どうした。おつりきな事を云ふな。お松ばう、おれがどうした。

かね ハテ、覺まさすと喰ひねえ。茶かす奴サ。お前、さう隠しても、十露盤絞りの手拭を、あの子に遣つたらう。

八 エ、おいてもくりやア。鐵か龜野郎がのを引ツたくつて遣つたのだ。

龜 いろくな事を云ふ。この野郎、とつけない嘘をつくぜ。

かね それ見なせえ。嘘はあるめえ。

ト流行り唄になり、花道より伴右衛門、木綿やつし布子、二本差し、頬かむり、藁草履にて、部屋頭の形にて、鼻唄を唄ひながら出て來り、直ぐに舞臺へ來る。

三人 どうした、頭、この頃はお出でがないの。

伴右 若い衆か。早くそゝりかけるの。姐さん達、どうだ、寒いの。

八 コレ、伴右衛門、この頃は根ツから逢はねえが、長屋へ来ないか。

伴右 ナニ長屋へ来ねえ事があるものか。おらア来るが、こんた衆が来ねえのであらう。綱打でも安宅

でも、我れどもが廻らないといふ日はおりない……時に、どうだ、長屋へ好い子が出たの。

三人 出りやアどうする。

伴右 どうするとは、身共も買ひに来るのだ。ほんにヤレ、烏の啼かぬ口はあれど、我れどもが屋敷から、そゝりに来ぬ日は無い。取分けこの長屋の三日月お仙か、小町の生れ代りか、辨天の幽霊かあの子を買ふべいと毎晩来るが、いつ来ても門の戸が閉つて、ちらりとも身共には拜ませぬ。どうした事だ。

かね ハテ、それだによつて、三日月お仙だわな。コレ、伴さん、なんとお前、わつちと河岸を變へねえか。手もたんとある女。達引に駈落ちは極まつたものよ。

まつ それサ、お仙さんだつても、わつちらと變つた事はござえすまい。あの子が半四郎に似てゐればわつちもつぶ栗藏だ。マア、一服のんで行きねえ。コレナサ。

ト吸ひつけてやる。伴右衛門、煙管を取つて

伴右 ナニサ、さう腹をお立て召さる事はねえ。併し、お仙とこなた衆と、一口には云はれぬ。お仙は天人か辨天……コレく、また戸が閉つてあるは小腹の立つ。もう先へぶツ込む奴があると見える。

ト戸を叩く。

かね なにサ、あの子は湯へ行つたわな。

伴右 ナニ湯へ行つた。有り難いよ。湯上がりをぶツこむべい。その湯屋は、どこだえ。

八 その横町。この中もあの湯屋の格子に、二時立つてゐるといふは、頭だらう。

伴右 うさアねえ。それも矢ツ張りお仙ゆゑだ。

鐵 成る程、いま流行る物は、麻の葉絞りと、三日月お仙だ。

龜 爰の前を探して見や。愛嬌が溢れてゐる。

伴右 それに違ひない。江戸中での流行り神。ためえ達も、ちつと愛嬌を煎じて服めばよい。

かね 持薬にしやせう。時に、お前は口明けをしたか。

まつ わつちは三人サ。その中に、この中の隠居が来てノ、うまく綾なしたら、一本置いたわな。

かね そりやア野暮でない。もう夜見世になる。性を附けろヨウ。

ト鹽花を振り、戸を叩き、鼠啼きをする。

伴右 エ、あやまるなア。

かね まだ玉錢も取らないよ。

ト小指を出し

これくが面附きをするわな。

三人 謝るの。

伴右 廻つて来ようか。

かね さうしねえ。

まつ 其うちには、お仙さんも歸るよ。

伴右 有り難いな。

三人 ドレ、ひやかさうか。

ト四つ竹の入つたる合ひ方になり、伴右衛門先に、八、鐵、龜、捨ぜりふにて下座へ入る。お兼、お松、見世へ上がると、此とき向うにて

源六 お仙ばう、湯上がりだの。

せん 源さん、買出しか。

ト流行り唄になり、右の合ひ方にて、お仙、やつし、誂ちへの形にて、下駄がけ、箆に垢すりを附け濡れ手拭に浴衣を抱へ、出て来る。跡より源六、やつし、股引、藤倉草履、魚賣りの形、鏡を差し、魚の入りたる提げ籠を持つて出てくる。これに次郎、鐵棒を曳き、附いて出て、花道にて

源六 コレエ、てめえ、強勢に早足だ。韋駄天の娘ぢやアあるまいし。心待ちでもあるか。とんだ早い足だ。飛脚の女房になればい。

せん 久しいものサ、今日は錢湯へ行くのが遅れて、行くと早くどこがどう、早く上がつて歸らうと思ふのに、あの湯屋の番頭さんが、店頭のかみさんと話しを仕掛けて、それで遅くなつたから、早く歸らないと、又これくが氣障だわな。

ト小指を出して見せる。

源六 打ツちやつて置きやアな、あの小指が事を一々取上げ立てをすると、病持ちにならにやアならない。あの又、山の神は、變癡奇な面で、いゝ年をして、田原町の長野郎と逃けたぢやアないか。厚かましい、又この長屋へ歸りやアがつて、いゝ面の皮な。其方の宿六も、おえねえ大藏だア。

次郎 サア、それといふも親方が、結構人だからサ。

源六 結構人か知らねえが、おへねえ唐人だ。

次郎 マア聞きねえ。宿六があれだから濟むが、内はひつてんで、櫃も箆も叩き上げて、みんな伊勢七へぶツくらはせたわな。

源六 そいつは剛敵な事をした。

せん それだによつて、内か揉め返るわな。お前、知らねえ振りをしてるなよ。

源六 そいつは、おいらが知つては、内でも天井であらう。

次郎 そんなものサ。

せん マア、見世へ来て、一服のんで行きねえな。

源六 さうすべいか。次郎、来やな。

ト鳴り物の切れに、三人、本舞臺へ来る。

兼松 オヤ、お仙さん、今お歸りか。

せん 聞きねえな。あの湯屋の番頭さんから、彼の記しを聞きかけられて、ツイ近くなつたわな。尋ねはしねえか。

ト小指を出す。



三洋堂

豊國五 佐

かね イ、エ、今日も又、何處へか行つたよ。

まつ いつそまだ浮世が抜けねえよ。

かね 聞きねえ、昨日堀の内へ、裸足参りに行つたよ。否だなう。

せん 氣紛れがまだ立去らねえなう。

ト其を吸ひつけて源六にやる。

源六 次郎や、てめえ大分、薄ッぺらだな。又えてか。久しい病だ。

次郎 なにサ、兄貴、聞いて下さい。とんだ災難に會ふものだ。横町の湯屋で、身ぐるみすつかりと板の間に稼がれた。ソレ、あの廣棧の口綿、三野郎が前から買った茶微塵のソレ、絞りの單物に二本通川の博多帯が、ぐつすりとやりやアがつた。腹が立つてならねえが、と云つてどうも詰らねえから、角の伯母御を口説いて引ッ張つて居るが、えて吉に借りたのよ。コレ、お仙さん、昨日云つた、彼の事を呑み込んでくんねえ。二朱一本の廣袖でも出して着にやア、外聞が悪いわな。

せん ハテ、いゝわな。どうかして晩にやア通してやるよ。

源六 お坊さん御成人といふ態だ。

せんよしねえ、ぢらしなさんな。それでも憎まれねえお庇にやア、あたじけねえ伯母御が貸して置くやつサ。

次郎 おかつしやいな。コレ兄貴、いま路地の入り口で、紙入れを拾つた。何ぞあるか、見なんし。

ト紙入れを出して源六に渡す。源六、捨ぜりふにて中を改める。

源六 何だかゴテ／＼とあるワ。ハア、源水の齒磨に、馬道の反魂丹。コレ、七色唐辛子もあるワ。何だかくされの文があるわえ。

ト文を出し、ひろげて見る。

「先日はゆる／＼御目もじなし、山々嬉しく存じり、近きうち御はこび、神かけて念じ祈りり」も凄まじい。こいつは四六玉の文たわえ……イヤア、しつかりあるわえ。四文錢で二十七文と。この藥は何だ。四つ目の附いたのは、長命丸だ。コレ、次郎や、この紙入れを落した奴は、剛敵と好きな奴と見えるわえ。

次郎 そりやアお國ッぼうが落したのでごんせう。お仙の見世で長命丸とは、縁起がいゝねえ。せん 氣障な事を云ひなさんな。好かねえなう。かね オヤ／＼、もう日が暮れたよ。

まつ 斯うも短かいものかなう。

次郎 兄貴、今の四文錢で、八公の所で、牡丹の吸ひ物で、一杯いかうぢやねえか。

源六 否な事／＼。おらア金毘羅様へ四つ足は一生斷つた。

次郎 そんなら池田屋で、ぶツかけ豆腐と洒落よう。

せん 源さん、廻つて來なんし。

源六 サア、次郎、來や。

トさんげ／＼の合ひ方になり、源六先に、次郎、鐵棒を曳き、下座へ入る。お仙、お兼、お松、てんでに見世へ上がり、附木にて行燈へ火を灯す。ト下座よりも花道よりも、仕出しの若い者、大勢出てくる。

若一 サア／＼、いゝ次手だ。評判の三日月お仙を見て行かうぢやアねえか。

若二 それ／＼、とんだ美しいものた。杜若に其まゝだ。

若三 吉原の花魁にも、あんな玉は無い。

若四 アレ／＼、あの中の見世が評判のお仙サ。

若一 とんだ美しいもんぢやアないか。

かね カウく、町人さん、寄んねえな。
まつ カウ、寄んねえな。用があるわな。

ト仕出し捨ぜりふにて兩方へ別れ入る。下座より伴右衛門出て來り

伴右 イヤ、灯がとほつたら、みんな美しく見えるわえ。どうだ、お仙ばう、身共にもとほさせる事は
どうかく。

せん 伴さん、お出でか。

かね お前、どこへ行つて來たのだ。

伴右 おらアぐつときめつけて來た。今夜は宵にも泊つた。コレ、お仙ばう、吸ひつけてくれぬか。

せん お前、貰は嫌ひぢやアねえか。

伴右 なにサ、のむのよ。常は嫌ひでも、お仙ばうなら吸ひつけ煙草を、いくらでものむのサ。たとへ
脂に酔つても、のむから吸ひつけてくれ申さぬか。今夜は一昨夜の晩のやうに、横さア突ツ張つ
ては否だよ。癖味なしに、ナウ。

せん エ、氣の強い。

伴右 何が氣が強い。

せん 今夜はお前が泊らうと云つても、約束があるから泊りは取らねえよ。

伴右 泊りが出來ずば、四つまで遊んでゆくべい。

せん 四つまでも心待ちがあるから、どうもし憎い。

伴右 そりやア、なぜく。

せん なぜでもサ。

ト其のみある。

伴右 てまへ、そんなに悪くしねえものだ。おれも碓氷さまの屋敷では、部屋頭の伴右衛門だ。てめ
えをおらが馴染みにすべい。おらが屋敷の組子どもにやア、一々申し聞せて、てめえの所へは上
がるめえといふ、連判に爪判のう取つて置いたワ……イヤ、また惚れるも無理はない。武士の飯
を食ふ我れども、否でも應でも逢うてもらはにや侍ひが立たぬ。コレ、武士が手を合せて拜み申
す。これぢやく。

ト拜む。

せん コレ、そんなに拜んでくんなさんな。わつちやアまだ佛にやアならねえよ。さしがあつて逢はれ
ねえ筋だから逢はねえといふに、お前でもあるめえ、自烈てえよ。

伴右 コレ、貴公は解らぬものだ。自烈たい恥を云はねば理は解らぬ。フツとこの長屋へ来て、そ
もじに惚れて、御奉公も疎かになつて、切り米も扶持も約束も、みな打込んで、椀久ではな
いが、こんな形になられたが、其許との心中なら、たとへ火の中水の底、来いといへば野の末山
の奥、虎臥す野邊の果までも……イヤ待て。その虎臥す野邊はお断わりぢや。ハテ、道の程が知
れぬゆゑ、路金の貯へがない。その外の儀は何なりと、お断わりは申さぬ。コレ、斯う云ふうち
も堪へられぬ。

トお仙に縫りつくを突きとばし

せん お前より、わつちがどうも堪へられねえわな。

伴右 これはどうぢや。此やうに割ツつ口説いつ申すのに、聞き分けせぬのか。オ、おれも武士の端
くれ、切り見世の女に突き出されては、傍輩どもの手前、殿様のお名の出る事だぞ。モウ、
何も云はれぬほど惚れたによつて、口説くもの、御大層らしい、わればかり切り見世の女郎衆
か、この長屋にも恐らく女郎の七八十人もあらうが、また武士の威光で色にして見せるワ。コレ、
さう云はれては、てめえも立つまいが、立たずばおれが色になれ。おれも又、云ひかゝつたから
は、色にならうといへば跡へは引かぬ。たとへ色にならずとも、お仙を自由にしないうちは、こ

の長屋を五分五厘五毛も外へは出やアしねえぞ。イケ太々しい女だ。

せん なんだ、女呼はり、よしてくんな。そんなにお前が熱くなつて云ふほど、わつちやア何ともない
よ。

伴右 エ、このふんばりめ。逢はねえといつて、その分にして置くべいか。身共、劍術の奥儀の手を
出して、通さずに置かうか。

ト立ちかゝる。お兼、お松、これを留める。下座より源六と次郎出て来り、伴右衛門を抱きとめる。

兼松 コレ、伴さん、待ちなさい。

源六 アタ、イケ騒々しい。どんな出入りか知らねえが、悪くはしめえ。待たつしやいく。

伴右 否だぞ。武士が立たぬ。

次郎 なんだな、立たないくと、立つて居るぢやアねえか。マア下に居て云ひなさいな。

伴右 オ、おぬしやア次郎ぢやアないか。立たぬぞ。

次郎 ハテ、いゝわえ。親方、築地が来たよ。譯を云はつしやい。

源六 コレサ、屋敷の客人、騒ぎなさんな、間違ひだ。高が女の事だ、打ッちやつて歸りなよ。

伴右 イヤ、歸り申さぬ。歸られねえぞ。コレ、おてまへ、誰れだ、

源六 アイ、わしやア魚賣りの、三田の源といふ者だ。

伴右 なんだ、魚屋の源でも、板屋の勘でも、お身達の知つた事ぢやアねえぞ。退いて居やれ。

次郎 サア、い、わなく。ぬしやア餘所の人だ。この長屋の番をしてゐる次郎、まんざらお身さん達を凹まして歸すものかな。ハテ、跡々の商賣の邪魔になるわな。靜かに云つても解る事だ。コレお仙さん、こりやマア、どういふ入譯だの。

せん なにか小むづかしい話しあひのあるやうに云ふよ。譯はねえわな。

伴右 いんにや、むづかしい話しあひの事だ。高が四六屋體の切り見世で、阿房にするから腹が立つのだ。コレ、マア斯うでござる。この長屋の者に、そんならそれと云はれるにも、元手のいる事だ。毎晩來るもコレ、お仙を……買ひたいからの事だわサ。

次郎 サア、よしサ。譯道は聞いたよ。

伴右 サ、聞えたなら、おれが無理ぢやアあるまい。おぬしも知つてゐるが、爰へ來るが最後、ほんに助六ぢやアねえが、長屋中から貰で煙管の雨が降るやうであらうが。ソレ、それ程に大切がれるお客を、なぜ安くするのだ。安くするから腹が立つ。

源六 サア、みんなお前が尤もだよ。この子といつたつて、お前を安くする出入りもあるめえが、

そりやアほんの間違ひといふものだ。堪忍しねえ。

伴右 間違ひか輪違ひか知り申さぬが、この長屋へ毎晩來るも、恥かしい事だが、あのお仙に逢ひたいからの事よ。聞かつしやいよ。一昨日の晩も、久しい約束で、お切り米が渡ると、御門番へ酒の一升も袖の下を使ひ、コレ、勤めばかりではねえよ、屋敷の内へもそれぐに、物を遣はなければ、御門だつても度々出憎い。して見れば、甘い出入りぢやアござらぬ。四つからの勤めが、一本に二百五十の、酒が一片。百の鍋焼ばかりでも淋しいから、蕎麥を取りにやるにも氣を付けてしつほく花巻、兩隣へ一つ宛。これぢやア濟まぬと、また内の噂ア衆にも、沙汰無しにしては置かれず、假染に蕎麥ばかりでも、百五十は要ります。その蕎麥を一つ食はぬかと云へば、否たと云ふから、コレ、折角買つたものを、心を無足にするといふものだ。まだその上に茶瓶も取つたによ。二朱やそこらは、ちびくとなくなるのよ。よしか。コレ、その羹花を飲んでから、寐たと思はつしやい。そこで、嬉しやと思つたら、癩が起つたといふから、脊中を撫るやら、揉むやら、おれもその時、腹が立つたが、イヤ、茲が武士ぢやと辛抱して、揉んでやつたのサ、其うちに烏がカアと啼く。納豆賣りの聲はするサア、詰まらぬではござらぬか。屋敷へ歸らねば、御門番の衆の前が悪し、そこぐにして歸りがけに、また晩に來ようと云つたれば、

なに食はぬ顔で、晩に来てくんねえと送り出しおつた。昨日も昨夜も頻りに来て、附いて居るやうにするに、知らぬ顔ぢや。これが腹が立たいでならうか。今夜も泊らうと云へば、さしがあるの障りがあるのと云つて、貰一服吸ひつけてはくれぬ。コレ、若い人、これがマア腹が立たいで居られるか。この伴右衛門が云ふのが無理か、無理でないか、聞き分けて下さい。情知らずの、ふんばりめ。

源六 ようごんすわな。さう聞いては、お前の無理は一つも無い。が、そこサ、變つたもので、なんほしがない勤めをするこの子達でも、否な客には、逢ふ氣はあるまいのサ。

伴右ア、そんなら我れどもは否な客か。ハテ、あんまり捨てた男でもないぞえ。

伴右アレ、あんな事を云ふわサ。

源六 サア、いゝわサ、お前が其やうに腹を立つのも、根がこの子に氣があるからの事であらう。

伴右 さうサ。

源六 そんなら、おいらが一番仲人に入つて、丸くなるやうに、お仙ぼうをお前に執持つたらよからう伴右 そりやア何より忝ないの。

せん これサ、源さん、ひよんな事を云つて、跡でわつちを手こづらせる事は御免だよ。

源六 ハテ、そりやア主の心にある事だ。ナウ、次郎。

次郎 ハテ、そりやアそれサ。主達のやうに、長屋へ足近い衆に、いさくさがあつては、跡の爲になりやせぬ。そこを又お前も苦界だと諦めて、ちつと附合へばいゝワ。何であらうと、わつさりと機嫌を直して、ナア兄貴。

源六 それよ、そりに来て腹を立つ者は野暮、白癡のやうで薄ッぺらに見えるから、お仙、吸ひつけて進ぜさつしやい。

せん きつ附合ひだの。

ト吸ひつけて出す。伴右衛門、嬉しそうに取つてのみ

伴右 コレ、斯うされちやア、何も腹の立つ事もおりない。どうかコレ、貰ばかりぢやア物に極まりがない。コレ、一片取らうか。

ト懐より錢を一本出し、次郎へ渡す。

次郎 エ、又お前、跡で酔つて、いさくさは御免だよ。

伴右 イヤモウ、これきりに何も申さぬ。次手に肴も頼むよ。

次郎 呑み込んだ。御用めが居ればいゝが。

ト錢を持って下座へ入る。

せん カウ、お松さん、聞きねえ、作さんが一片取りにやつたよ。
まつ 大分はすんで来たの。

源六 うさアねえ。

ト次郎、白鳥の徳利と、井に肴を入れて持つて出る。

次郎 サア、作さん、取つて来たよ。

ト茶碗を出す。

伴右 こりやアいかいお世話。爰へ出さつしやい。サア、先生、始めさつしやい。

源六 マア、お前から始めなさい。

伴右 ドレ、酌を参らう。

兼松 わつち等もお相としやせう。

ト次郎ついでやる。伴右衛門のんで源六へさす。これより杯の取やりになり、伴右衛門は井の蝸の足を嚙りながら、咽喉へつまり、せきくするこなし。これにて皆々驚き

源次 こりやアどうだ。

兼松 伴さんえくく。

ト春中を叩いてやる。伴右衛門、キヨロくする。

源六 どうした。

次郎 こりやアなんだ、蝸の足が咽喉へ引ツかゝつたのだ。これなりに長屋で頓死でもされちやア亂騒ぎだ。薬は無い。

源六 待ちやれよ。先刻おぬしが拾つた紙入れに、薬が慥かあつたさうだ。

ト源六、以前の紙入れより、紙包みの薬を出し、その中の蛤貝を明け、丸薬を出して伴右衛門に服ませ

どうだ、部屋頭、薬だよ。氣を付けさつし。

トこれにて伴右衛門、思ひ入れあつて段々としやきげる。木のやうに手をひるげる。

皆々 これサ、どうしたものだ。

女三 伴さん、心持ちはよいかえ。

伴右 イヤ、いま我れどもが、蝸の足を咽喉へ引ツかけ、ギチカバするうちに、薬を服ましてくれたな

源六 オ、サ、薬を進せたが、どうだえ。

伴右 イヤモウ、心持ちか、もぐらもちか、體ちうが炎々と熱くなつて、コレ、筋骨も節くれ立つて来たが、體か棒を呑んだやうで動かれねえ。こりやマア、どこの薬だ。

源六 慥か馬道の反魂丹だと思つたが、間違やアしないか。

ト云ひながら、紙入れを出して

待てよ。反魂丹は爰にある。今の蛤にあつたは。次郎や、部屋頭に、とんだ薬を服ましたわえ

次郎 どんな薬を服ませた。

源六 反魂丹だと思つたが、長命丸を服ませたか。

次郎 こいつは、死にはしまいかの。

源六 なにサ、打ツちやつて置け、長生の薬よ。

伴右 ア、コレく、なんだ、長命丸を服ませた。そりやア大方おれが、兩國で買つて来たのであらう。なんでもお仙に川るようと、紙入れへ入れて置いたを、カラ打落した、その長命丸が、廻り廻つておれの腹へ入つて、身内が此やうに、しやつきり張つて苦しむも、ア、コレ、長命丸の報ひ。ア、コレ、水でも飲ましてくれ。咽喉がひつつくやうだ。

源六 ア、そんなら次郎が拾つた紙入れは、貴様のか。念が届いて長命丸は川るたが、こなさんの體に薬が廻つたのだな。

次郎 コレ、兄貴、水でも飲ませてやらうではないか。

源六 そこらに水があらう。取つて來や。

次郎 合點だ。

トかけてある貧乏樽と杓を取つてくる。

源六 サアく、水を飲まつしやい。

ト口許へ樽を押しつける。伴右衛門、一息に樽の水を飲んで、ぶる／＼としてこけ倒れる。皆々寄つて

次郎 部屋頭、コレ、氣を確かに持たつしやい。どうだく。

伴右 ア、／＼く、今の水を飲んだら、身共の體がグニヤくと、一向に體がきかぬワ。

源六 こいつはとんだ事だ。そんな病人を長屋へ置いちやア面倒だ。次郎や、若い者を呼んで、送らせ

てやらねえか。

次郎 さうしやせう。コレ、若い衆や、來てくんねえく。

ト呼び立てる。これにて八、鐵、龜、捨ぜりふにて出て來り

八 次郎や、なんだ、また長屋にいさくさでも始まつたか。

鐵 どの野郎だ。くらはせてやるべし。

龜 その野郎はどこに居る。

次郎 これサ、喧嘩ぢやアねえわな。とんだ病人が取れた。その病人を送つてもらはうと、それで呼んだのよ。

八 おきやアがれ。病人を送れか。コレエ、風の神は送つた例しがあるが、病人を送つた例しはない。とんだ癡言を吐くぜえ。

次郎 これサ、腹を立てる事はない。てめえ達も友達同然の、伴さんが急病だわな。
龜 ナニ伴公か。そいつはとんだ事だ。ドレ、どこに居る。

ト三人、伴右衛門がグニヤついて居るを見て

三人 コレ、伴公さん、どうしたのだ。

伴右 オ、若い衆か。俄に身共珍事ちうよう、悪事災難。恥かしながら、奇妙な薬を飲んで、體がおへたりおへんだり、おへねえ目にあひ申す。

八 そりやア大方、中氣であらう。

鐵 よい／＼になつたのかも知れねえ。

龜 慥かにそりやア、疝氣だ。

伴右 何でもい、から貴公達、屋敷まで送つてくれぬか。

八 まんざら知らねえ顔でもねえ。送つて進ぜう。

三人 マア、立たつしやい。

ト無理に引立てる。伴右衛門、グニヤ／＼として居る。八と龜、腋の下へ入り、鐵、後を押へて花道へかゝる。

伴右 ア、コレ、若い衆、いかにお世話になる事だ。よい／＼とやらであらうか。古いやつだが引込みは、お定まりの狂歌、斯うもあらうか。

三人 どうだ。

伴右 「たてようと思ふ薬をかゝらのみ、なんて宗三は綿に成田屋」

三人 何を云はつしやる。

伴右 それでは、やらうぞえ。

三人 よい／＼。

四一八

ト四つ竹の合ひ方にて、介抱しながら伴右衛門を押して向うへ入る。

源六 イヤハヤ、とんだ樂だ。

次郎 あの唐變木を送り出した喜びに、一つやりやせうか。

せん ほんに、あんな仁もないものだなう。

かね 伴さんがやかましく云ふところを、源さんが口をきくなすつたから、お仙さん、嬉しからうの。

せん わつちやア眞に嬉しいよ。

ト次郎、酒を飲みながら

次郎 嬉しがるやつサ。畜生め。

せん 打ツちやつて置いてくんねえ。

源六 イカサマ、あんな氣紛れが来た時は、ぬし達も手こずるであらう。

せん それサ、挨拶するも否でならねえのに、あゝうるさく云はれては、しみ眞實小腹が立つて、悪しくすりやア今のやうに、向うも熱くなつてやかましく云ふのを、源さん、よく世話をしてくんねえ。眞に嬉しいよ。

かね お仙さん、眞に嬉しくば、きつと禮があらうの。

まつ 禮を云はれちやア、源さんも引かれやアしめえ。なう、お兼さん。

かね さうサ。

源六 なんだ、この子達は、味な事を云ふの。禮を云はれては何が引かれねえ。

まつ お仙さんがお前に

源六 お仙ぼうが、おれにどうした。

次郎 兄貴に氣があるとよ。

トこれにてお仙思ひ入れ。

源六 おきやアがれ、好い機嫌な。

次郎 ハテ、きまつてやらつしやいよ。

源六 馬鹿を云へ。爰ら界限をほつき歩いても、びりにかゝつた事のねえ源さんだ。そんな嫌味な事があつて歩かれるものか。この長屋へ遊びにも來られねえわな。

次郎 サア、何かさう物を凄く云ふ事はござんしねえ。お身さんが、どの子供衆とも心安いだけに、お仙さんも云ひ兼ねて居ることは、又わしも氣取つて居る。こなさんの氣性を、あの子が知つてゐる

四一九

るから、今日まで云はねえでゐたわな。きまつてやりねえ。あの子は地廻りの手合ひが、何の彼のと云つても、五分でも傾ぶきやアしねえ。その上に、地廻りなり下りの金の出来るつうくつもおれが知つてゐる事があるから、下歯に持つてやらつしやいな。

せん わつちもこんな節がなくつちやア、云ふもをかしらしいぢやアねえかえ。わつちが身にかつた事を、世話をしてくんなすつたお前だから、心安くしてもいゝぢやアねえかえ。

兼松 源さん、来て進ぜなせえな。

源六 エ、おきねえ。おらア生れついて、女にあんな事を云はれるのがきつい嫌ひ。そんな事にいちやつきの無い男だから、この土地へ來ても、附合ひが成るといふものだよ。

せん サア、附合ひに來なんすから、心安くしておくんなしな。

源六 とんだ事を云つたものだ、おらアそんな事は知らねえわな。

せん ぬしやア堅いよ。お屋敷ださうだ。

次郎 こりや斯うしよう。お仙さんの見世のいざごさを、兄貴が譯を附けたものだから、その禮に一杯進ぜなさいな。お松さん、お兼さん、なんとさうぢやアないか。

かね アイ、わつちらも頼まれてゐるから、源さん、お仙さんの禮を

まつ 受けねえなく。

次郎 これサ、お仙さん、兄貴へ禮に、一つ飲んで献しねえな。

せん わつちが飲んで献しても、源さんが受けなんせうか。

源六 禮なら受けねえ理屈もねえのサ。

せん ついでくんねえ。

ト茶碗を取り、お兼ついでやる。お仙飲んで

源さん、お禮だよ。

源六 お禮なら、一杯氣を附けようか。

次郎 煽ツ切らつしやいな。

源六 ついでくりやア。

ト次郎ついでやる。源六受けて飲む。

かね そりやア、祝言が極まつたよ。

源六 なんだ、祝言が極まつた。

まつ 次郎さん、めでたく一つ謠ひねえな。

次郎 諺か……高砂や、この裏店に祝言は、源の嬢アが極まりけり。

源六 おきやアがれ、何の癡言だ。

次郎 ハテ、祝言だから、思ひ附きの諺を諺つたのだ。時に、仲人は宵のうちの事だ。わしらアもう開かう。

兼松 わつち等も開きやせう。

次郎 ア、寒くなつた。鴨蕎麥を當て身と出かけよう。

源六 そいつは剛敵だ。一つ行きたいな。

次郎 兄貴は爰で、うまく喰はつしやいな。

源六 何を。

次郎 ぶつかけをよ。

かね お仙さん。

せん エ。

まつ 源さん。

源六 なんだ。

兼松 おしけりなんし。

次郎 廻りなんし。

ト四つ竹の合ひ方になり、次郎は下座へ入る。お兼、お松は見世へ入り、戸を閉める。兩人残り

源六 コレナ〜、さう情なくする事はねえ。お松ばうや、お兼さん、附合はツし。コレ、次郎や、も

う一杯飲んで行かぬか。

せん これサク、捨て、置きねえな。

源六 どれも〜、おれ一人捨て、うしやアがつた。

せん ハテ、捨て、もお前は、わつちが拾ふわな。

源六 そいつは有り難いな。

せん 有り難いと思ふ氣なら、今から心安くしてくんねえな。合點か。

源六 合點かとは、何の事だ。

せん ソレ、わつちを女房にと、思つてくんねえな。

ト思ひ入れ。

源六 なんの事だ。おらアそんな事は小ッ恥かしくつて、嫌ひだといふのに。

せん ナニ、嫌ひだえ。

源六 きつい嫌ひサ。

せん ぬしやア男ぢやアねえか。

源六 男サ。男がどうした。

せん サア、平常から男氣を見込んで居るから、わつちが口からこんな事を云ふからは、お前、男なら男らしく、達引をしてくれたがいゝわな。

源六 男づくの達引なら、五分でも凹むのぢやアねえ。おれも三田の源と呼ばれちやア、相應にけちな

子分の四五人もあつて、ほんの事だが根岸金杉、下谷切つて瘤を出す若い奴等に附合ひ、どこの仲直りに出ても、階子の上がり口に坐つて、中腰で酒を飲むのぢやアねえ。そんなじよその某と、人に立てられるせうがには、頼まれた事を、ついぞぶん流した事のねえ男だ。

せん サア、その頼もしいお前だによつて、源さん、頼んだによ。

源六 何をよ。

せん 女房に持つてくんねえな。頼んだからは、もう引かせはしねえ。わたしが飲んで献した杯を飲みなすつたからは、祝言は極まつてある。女の方から献す杯は、一生に一度。男を立てるお前ゆる

源さん、頼んだからは引かれはしまいの。

源六 よくきめつけるたほぢやアねえか。そんならいゝわな。男と見かけて頼まれたが因果だ。達引づ

くに、男にならうわサ、

せん 女房に持つてくんなさるか。

源六 エ、しちくどい。

ト合ひ方、お仙飲んで源へ献す。

せん もう一つ飲みねえ。

源六 また飲むのか。

せん これが、きつとした固めだよ。

源六 なんだ、固めかよ……とんだ片目だア。生姜を賣らせればよい。いつそのくされ、固めやせう。

サア、つぎやな。

トお仙つぎ、源受けて

南氣かして熱くなつて来たわえ。コレ、お仙ばう。ほんに、女房に持つからは、お仙ばうと云つては悪いなう。今からは、下齒と云はうか、嬪アと云はうか、云つて見るから、必ず笑ふめえ。

ソレ、云ふぞよう……コレ、嬬ア。

せんエ。

源六 氣が違つたさうだ。女房の固めといふものは、大分熱いものだ。

ト手拭で汗を拭きながら眞面目になる。

せん お前、寒くならうによ。もう四つでもあらうか。源さん、寢ようかえ。

ト思ひ入れ。

源六 なんだ寢よう……なんだかおらア熱いやうで、寒いやうで、小ッ恥かしくつて、味な氣持ちになつて

せん サア、見世へ來なさい。

ト手を取る。

源六 見世へ行つてどうするのだ。

せん もう寢るのだわな。

源六 もう寢るのか。この夜の長いのに。

トお仙、源六の手を引き、見世へ入り、顔見合せ、思ひ入れあつて

嬬ア。

せん 旦那どの。

ト思ひ入れ。

源六 氣が違つたさうだ。

ト唄になり、戸を閉てる。四つの鐘。所々にて拍子木打つ。向うより兵太、大小。紺看板の奴兩人に、四つ手賀籠を擔がせて出て來る。下座より次郎出て

次郎 縮まりやす。

ト云ひながら、兵太と顔見合せ

あなたは上條兵太さまではござりませぬか。

兵太 其方は路地番の次郎、よい所で逢つた。かねて頼み置いたる彼のお仙が事は、なんと致した。

次郎 そこに如才はござりませぬ。私も金になる事。お頼みゆるに、お仙にも申し聞かせ、あの女も随分承知でござりまする。

兵太 それは満足。然らばお仙を呼び出してくりやれ。

次郎 畏まりました。

ト真中の戸を叩く。内にて

せん 誰れだ〜。

次郎 コレ、お仙さん、ちよつと明けてくんねえ〜。

トこれにて戸を明け、お仙出て来り

せん 次郎さん、何の用だ。

兵太 イヤ、別儀でもない、契約の通り迎ひに参つた。

トこの時、戸を明け、源六額を出して見、合點のゆかぬ思ひ入れ。お仙、思ひ入れあつて

せん お屋敷さん、ようお出でなさんしたなア。

兵太 約束の通り、金子五十兩、相渡す上からは、身共と共に同道しやれ。ソレ、五十兩。

ト財布の五十兩をお仙に渡す。

せん アイ、こりやア申し、お金かえ。有り難いね。

トこの時、源六、ツカ〜と出て

源六 アイヤ、憚りながらお侍様、お仙をどこへ連れてお出でなされますな。

兵太 其方は何者だ。

源六 ハイ、私はこの女に、ちつとかゝり合ひの者でござりまする。コレ、お仙、こりやママどういふ理屈だ。

せん サア、譯といふは、この侍ひさんが、この間中度々お出でなすつて、屋敷へ一日雇はれてくれいその代金を五十兩やらうと仰しやるから、あんまりおつりきな事ゆゑに、譯を聞けば、奥様とやら、お姫様とやらの、酒の相手にしたいとお頼み、ハテ、何をしても勤めのこの身、参りやせうと云つたから、それで迎ひにお出でなさんしたのサ。

源六 ウム、五十兩といふ金で、お仙を一日雇ふとは、どうもこいつは、おつりきな話だ。お仙や、てめえ又、とんだ目にあふなよ。

次郎 これサ兄貴、あの子だつても、子供ではあるまいし、如才は無いわな。

せん わつちが屋敷へ行つた跡で、親方の前をこの金で、源さん、お前いゝやうに頼んだよ。

源六 案じる事はねえ。おれが呑み込んだ。

兵太 サア、夜の更けぬうち、ちつとも早く……家來ども、その駕籠へ。

ト四つ手駕籠へお仙を乗せ、花道へ行かうとする。源六、心得ぬこなしにて

源六 モシ〜、お侍様。して、お仙をお連れなされますその先は、何と申すお屋敷でござります

兵太 そのお屋敷は忝くも、河内守頼信さまのお屋敷だワ。
源仙 エ。

ト兩人顔見合せて思ひ入れ。

源六 頼信さまのお館へ、アノこの金で
次郎 その金を

ト財布を取りにかゝる。立廻りに源六、側にある手桶をかぶせる。

嬢ア、行つて来や。

トしやんと手を打つ。木の頭、この途端に次郎、桶を被りながら見事に返つて下に居り眞面目になる
あの面を見や。

トよろしくキザミ、ひやうし

幕

第一番目 五建目 頼信館の場

役名

河内守源の頼信 實ハ今張六郎隆行、市原野の鬼丸 實ハ源の頼信。源家の臣、平井保

昌。敦賀郡司爲時。堤の彌三。奴、國平 實ハ常陸之助國春。同、里平。大宅太郎光遠。奴、伊與
助 實ハ純友一子十太丸。物部平太有風 實ハ長尾新六景道。船頭、洞九郎。魚賣り、三田の源六 後ニ
三田源太廣綱。室津權の頭時純 實ハ伊賀壽太郎成信、保昌妻、和泉式部。同妹、伏屋。傾城、若
松 實ハ純友娘玉琴。小姓、主水。同、左門之助、周防の内侍 實ハ三日月お仙。

本舞臺、三間の間、高足の屋體、升組みの揚げ障子。上の方、白梅の盛り、下の方、紅葉の大樹、左
右萩垣、すべて頼信館の體。爰に爲時、上下衣裳。彌三、麻上下、股立ち。光遠、上下、大小にて、
葛蒲草の侍ひ二人、黒塗り金物打ちたる細長き長持を昇き、これを光遠、警固してゐる。伏屋、振り
袖衣裳、梅の花を活けし竹筒を持ち、立ちかゝりゐる。琴唄にて幕明く。

ト彌三、長持へ思ひ入れあつて

彌三 見ますれば、頼信公の奥殿間近く、警固おしやるこの長持。光遠どの、勤番いたす堤の彌三、吟
味いたさぬ其うちは、滅多に奥へは通されませぬぞ。

光遠 ナニ小ざかしきその一言。大宅の太郎光遠が、頼信公の仰せを請け、廓遊びの手道具を、持参い
たしたこの長持。わいらに見せるに及ばぬ事、キリく奥へ通すまいか。

爲時 イヤ、太郎どの、扣へ召されい。頼信公には御正印を、失せさせ給ふお咎めにて、蟄居同然。その付き人は平井の保昌、兄君頼光公には、上總の國へ任にお下り遊ばされ、いまだ御歸館なきといひ

伏屋 殊には只今繼仲公より、内意のお使ひ、物部の平太どの、兄保昌が歸りを待つて、奥の間にお入りといひ、廓遊びの手道具と、聞いては猶々奥殿へ

彌三 迂濶にやアやられぬこの長持、身が改めて
光遠 ほてぶしかけなば光遠が

ト長持を圍ふ。彌三、立廻りにて引下ろす。侍ひうるたへ、光遠圍ふを、彌三改めんとする立廻りに、長持の蓋を明ける。中より洞九郎、三建目の形にて飛んで出で、伏屋を突きのけ逃げんとするを、爲時キツと止めて

爲時 さてこそ怪しい下素親仁、なんでおのれはこの中に、隠れ忍んでうせたのだ。

洞九 ア、モシく、わしは矢橋の渡し守、洞九郎といふ正直親仁、この中にかゝんでゐたは彌三云ひ譯あらば、キリく吐かせ。

洞九 そんなに嚇かさつしやるな。なんでござる。オ、それく、今日この屋敷へござらした、物



三田の源
坂東三洋立

三田の源

三田の源
坂東三洋立



洞九ア、モシく、わしは矢橋の渡し守、洞九郎といふ正直親仁、この中にかゝんでゐるたは
 彌三云ひ譯あらば、キリく吐かせ。
 洞九 そんなに嚇かさつしやるな。なんでござる。オ、それく、今日この屋敷へござらした、物

部の平太さまに、急にお目にかゝらねばならぬ用事、と云つたところがこの態では、奥御殿へは叶ふまいと、太郎さまの長持の中へ、幸ひとお願ひ申して、ちつとのうちかゝんで居つたは、わしが誤まり。これより外に云ひ譯はござらぬ。太郎さま、左様ではござりませぬか。

光遠 成る程、おのれが申すに相違ない。その證人はこの光遠、疑がはしくば身が預かる。この者太郎が預かりませう。

爲時 光遠どの、仰せなれど、承れば彼奴は、洞九郎と申す舟乗りとやら。その洞九郎と申す奴は、いづぞや江州石山にて、娘式部が親なりと、偽り騙りの正しく老ほれ。

洞九 ア、モシ、どうして、そりやア私しではござりませぬ。

光遠 ハテ、よし又其方であらうとも、身が預かつた上からは

彌三 すりや、どうあつてもその者を

光遠 身共がきつと預かつた。

彌三 ハテ、太郎どのには、肩持ち顔が呑みこめぬ。

ト思ひ入れ。向うにて

呼び 御歸館。

ト呼ぶ。皆々思ひ入れ。

爲時 ありやア頼信公の御歸館の知らせ。拙者も待ちうけ保昌に、申し談ずる仔細もあれば、奥へ参つて

光遠 洞九郎は身が預かる。氣遣ひなしに。

洞九 へい、それで私しも、落ちつきました。

伏屋 郡司さまには、然らば一間へ。

爲時 光遠どの

光遠 爲時どの

兩人 同道いたさう。

彌三 怪しき舟長。

トかゝるを光遠、洞九郎を圍ひ

光遠 ござりませう。

呼び 御歸館。

ト呼ぶ。太鼓、摺り鉦入り、傾城の出の鳴り物になり、爲時光遠、侍ひ長持を擔ぎ、洞九郎附いて奥へ

入る。彌三、伏屋残ると、向うより里平、奴の形にて、青目の草薙り籠へ紅葉を澤山に打込み、鎌の柄にて大提灯のやうに持ち、若松、襦袢、傾城の拵らへ、駒下駄にて出る。次に頼信、羽織衣裳、紫の置き頭巾、小さ刀、庭下駄、酔つたる模様にて、若松にもたれかかり、長き煙管を持ち、出てくる。國平、奴の拵へ、重ね草履にて、紅葉にて葺きたる長柄をさしかけ、主水、振り袖、袴、小姓の形にて、結構なる蓑盆を持ち、左門之助、同じく小姓の形にて、結構なる女郎の煙管、蓑入れを持ち、禿の見得。和泉式部、やつし赤前垂れ、仲居の拵らへにて、銚子杯を持ち、草履下駄にて、跡に附いて出て来り、花道に並ぶ。摺り鉦入り。

若松 見渡せば、錦に紛ふ照り紅葉、その紅葉にこき交せて、眞咲きかける花咲きの、梅の顔見世みな様の、お顔拜みに又爰へ、お召しに應じて廓から、來つてつれし八文字。

頼信 梅も紅葉も投げ入れの、水際清き花魁の、根曳きの松や若松の、松の位は太夫職、木振りに焦れ頼信が、人目關の戸やうくと、越えて願ひのお目見得は、また改まる初舞臺。

國平 初々しいと見たゆゑに、機轉きかして奴めが、ちよつと差出てさしかけた、紅葉色づく毛氈の、赤きは一陽來復の、陽氣凝つたる色一座。

里平 若い者やら廻しやら、大提灯に草籠を、見立てたところはまんざらでも、内證身分の千里、丁

度その名も虎藏と、改名したる云ひ譯も、爰に祝ひし祝ひ事。

主水 祝ふ千歳の松一本、實生えの松の縁とは、禿の名にし大寄せに

左門 對の小姓が間に合ひの、禿めいたるとりなりは、睦まし同士の小大和屋。

和泉 色の所譯ももつれたる、口舌の中の仲々も、解けて結びし替へ紋の、結び柏も若葉して、色に出

かゝり紅るの、赤前垂れの仲居役、仲睦まじき重年に

頼信 新参古参打交り、不調法なる我れくが、願ひも風の茸屋町。

國平 花立つ春の歌舞伎の正月。

和泉 太夫さん

若松 そんなら皆さん、ござんせいなア。

ト鳴り物の切れにて、この人数残らず本舞臺へ來り、頼信は真中の二疊臺の上うへに坐る。皆々並よく住

彌三 我が君頼信公には、只今御歸館遊ばされましたか。

伏屋 いつくよりも今日は、御寵愛の若松どの、御同道遊ばされ、また一層の、お慰みでござりませ

う。

國平 イヤモウ、お庭の紅葉の御趣向、たべつけぬ下郎なぞが、廓めかした若い者。

頼信 二人禿も間に合ひの、小姓どもを見立てたは、なんと大將も、まんざらではあるまいぞよ。

里平 左やうく、油断のならぬ頼信さま、この下郎めも、一番落を取るべいと、御覽じませ、紅葉の

籠を提灯とは、なんと近年の思ひつき。この間の茶番の趣向とは、また違つたものでござります。

左門 それも大方餘人の指圖、其方が案じではあるまい。なう、主水どの。

主水 左門どの、仰せの通り、よもや里平が思ひつきではあるまい。外に作者があると見えます。

里平 これはしたり、小姓方、毛頭外から指圖はござらぬ、と云ひたいが、二人の衆が云ふに違ひなく

身共が腹から思ひつきというては、五文の智慧も無い。それを有ると見せかけても、明るく見抜

くは、流石は二軒の大和屋め、梅檀は二葉、三葉は浸しぢやなア。

國平 これサ、何を云ふのだ。イヤ、さう云つても、一の趣向は和泉式部さま、紅るの袴を召されるあ

なたが、赤前垂れの仲居姿は、流石は保昌さまの奥様ほどあつて、イヤ、感心な儀でござります。

和泉 自らがあられもない、此やうな姿で参りましたは、仔細がござります。夫保昌の心に違ひ、離縁

いたされ、館を遠ざけ、目通りとても叶ひませす、逢うて何かのお詫びをと、思ひ附いたるこの

出立ち。あられもないと、お下けしみの程も、おはもじう存じます。

頼信 イヤモウ、常から物堅い保昌が、この度の越度を悔み、石山寺にて祈念と聞きしが、その節失ふ蜘蛛切の太刀、式部が難儀と聞きつるが、ハテ、頼信とても、太政官の御正印、失うたその科にて、日限りのうちに手に入らねば、どうで世になきこの頼信、明日の命も知れぬと思ひ、我まゝ氣まゝの阿房狂ひ。若松大夫を根曳きして、館へ引取り聞の伽。して、保昌は、他行いたしたか。

伏屋 ハイ、兄保昌ことは、奥庭の氏神へ、御武運祈りのその爲に、参詣仕つてござりまする。

彌三 殊更今日繼仲公より、物部の平太有風どの、保昌どのに面談なさんと、先刻よりの入來。もしや我が君、お云ひ號け遊ばされたる、周防の内侍の興入れを急ぐお使者なるかと、心を痛め居りまする。

頼信 なんのく、内侍は勅命による縁談、予が戀人はこの太夫。これはしたり、何やら浮かぬその顔つき、コリヤ、なんぞ又ふさぐ事が、出來たのかく。

若松 サ、心にかゝるは今聞いた、あなたの縁談遊ばさるゝ、周防の内侍とやらが

頼信 ア、コレ、周防も大紋も、内侍の事はサラリサツと、西の海へ、流して置きやく。

和泉 でも禁庭の勅命といひ、殊には御身の越度たる、太政官の御正印、日延べの日限りも今日限り。殊に劍の行くへも今に

頼信 ハテ、滅入つたる式部が詞、若松といひ兩人とも、浮かぬ顔色。コリヤ、席を變へて酒にせう。

サ、女子ども、奥殿に用意しや。

伏屋 畏りました。

頼信 サ、酒宴の催ふし。太夫もおぢや。

ト手を取る。向うにて

呼び 上使。

ト呼ぶ。頼信キツと見て

頼信 ヤ、上使とは、ハテ、酒宴の妨げ。悪い所へ。

ト思ひ入れ。

和泉 御上使入來とあれば、この姿にては恐れあり、私しは奥御殿へ

主水 お入りあらば、主水も共に

左門 左門之助はお側にて、

兩人 何かの御用を

和泉 ハテ、しほらしい二人の衆。

ト思ひ入れ。

國平 この國平も、あなたのお供を

和泉 國平、連合ひによいやうに。

國平 心得ました。

里平 下郎も部屋へ

和泉 我が君さま、後ほどお目見得仕りませう。

ト管絃になり、和泉式部、主水、左門之助、國平、里平附添ひ、奥へ入る。また向うにて

呼び 上使。

ト呼ぶ。三味線入り、亂れのやうなる鳴り物になり、彌三、伏屋出迎ふ。揚げ幕より時純、鉢かつら、

長上下、跡より保昌、羽織、大小、庭下駄。伊豫助、奴の拵らへにて、鶯の烏籠を持ち、附添ひ出で

時純 關白殿下の上使でござる。誰ぞお取次ぎ頼み存ずる。

保昌 これは思ひよらざる俄の御上使、拙者即ち頼信が付き人、平井の保昌と申す者。思ひよらざる主

君の疑ひ、殊に重寶蜘蛛切の御太刀、行くへ詮議の心願に、歩行を運ぶ庭前の氏神、只今下向の

折に臨んで、上使の御入來、直さまお跡に引添ひて、服改めぬ無禮の段、恐れ入り奉つてござり

伊與 お供は即ち若年の、お側去らすの奴の伊與助、いつもお庭の梅ヶ枝に、お放しなざる、放生會の

鶯、持参仕りました。

時純 跡より我れを見送りの……すりや、其許が源家の忠臣、武功のほまれ世に高き、保昌とのでござ

つたよな。關白よりの内意の趣き、申し聞かさんが、爰は庭先。

保昌 お請け申すは即ち拙者。イザ、まつあれへ。

時純 然らば同道仕らう。

ト管絃になり、兩人思ひ入れあつて本舞臺へ來り、時純、上へ通る。保昌、よき所へ平伏する。鶯

頼信 平井の保昌、参つたか。

保昌 ハッ、頼信公には、これにお渡り遊ばされますか。君の御武陣開くる心願、社參の度にいつと

ても、放ち遣はす鶯は、心ばかりの放生會、下向の道より御上使の御供、仕つてござりまする。

頼信 關白家よりの御上使とな。即ち我れらが館の主、源頼信。

保昌 執權平井の保昌、何事によらず、仰せ聞けられ下さりませう。

時純 いかにも、主人頼信どの、上使に立つたる某こそ、關白家の今参り、室津權の頭時純と申す者、以後お見知り下されませう。罷り越したる上使の一條、謹んで承られよ。

頼信 ハツ。

時純 先達て頼信へ、預け置かれし太政官の御正印、失せたりと奏聞なせしが、詮議の日限りも今日限り。その上源家の重寶たる、蜘蛛切の一刀、紛失との事。彼れこれ越度重なるところ、上をも恐れず頼信には、浮れ女遊女を召しよせられ、日夜酒興に現をぬかし、情弱の振舞ひ上聞に達し、何かは措いて紛失の御正印、劍の行くへ、相解らぬその時は、頼信の命の瀬戸、氣の毒ながら性根を据ゑ、お請けをおしやれ。返答聞かぬ其うちには、上使に立つたる權の頭、退屈ながらいつまでも、罷り歸らぬ。主従ともに、返答おしやれ。何とでござる。

保昌 御尤もなる御上使の趣き、天下に二つと掛けがへの無き、御正印を失ひし科、遁れがたなき主君頼信。

頼信 詮議の日限りも、今日限り。さすれば命は風前の灯火。

若松 すりや我が君にはその御寶、在所知れざるその時は、あなたのお身を

頼信 散らすも咲くも花筒に、生けしこれなる白梅同然。水際清き源の、水の助けに支へるか。讒者の風に散り行くか。

時純 して、讒者とは源を、拒む輩があるぢやまで。

頼信 いかにもござる。讒者ばかりか殘黨餘類、その寶の紛失も

保昌 天慶の戦ひに、亡び失せたる相馬の將門。又は藤原の純友が

若松 エ。

トこなし。時純も思ひ入れ。保昌、キツとなつて

保昌 サ、その殘黨の良門、伊賀壽、辛き命を打遁れ、及ばぬ大義の企て事。都の透間を窺ふ輩がござる。この殘黨を召捕らずば、なか／＼失せし御正印、行くへはよもや

ト時純へ目を附ける。

まだこの上に、日延への願ひ。

時純 拙者に致してくれいな。

保昌 いかにも。

時純 氣の毒ながら日延への儀は

保昌 叶ひませぬか。

時純 ハテサテ、笑止

保昌 ヤ。

ト思ひ入れ。

時純 千萬に存ずる。

トあざ笑ふ。保昌、頼信は時純へ思ひ入れ。管絃になり、奥バタ／＼にて、洞九郎走り出てくる。跡より爲時、追ひかけ出て、立廻り。伊與助、立廻つて

伊與 ヤア、尾籠千萬。頼信公の御前、殊に上使のお目通り、立はだかる慮外者、無禮があると、伊與助が赦さぬぞ。

洞九 ア、モシ／＼、私は何にも、慮外するやうな親仁ぢやござりませぬ。わしは物部の平太さまに、用事があつて参つた者。それをお待ひ様

保昌 ヤイ／＼、下郎め、賤しき身にて御前間近く、殊には今申せし物部の平太とやらは、何者ぢや。

爲時 アイヤ、保昌どの、この者が申したる、物部の平太とは、先程おてまへに面談せんと、繼仲公より罷り越したる、御使者と承りしが、何とも以て。

保昌 これは郡司爲時どの、すりやアノ保昌の他行の間

爲時 貴公の歸りを相待ち居つたて。

洞九 モシ／＼、殿様、お前それで解りませう。今云ふ通り、その平太さまに、ちつとお目にかゝりたくつて、跡を追つて來ましたのサ。ナニ年寄りか嘘を吐きませう。ちよつと平太さまに逢はせて下さりませ。ハテ、あの人は、どこにござるやら。

トきよろ／＼尋ねる。

爲時 コリヤヤイ、おのれ、合點のゆかぬ奴。承ればこの程も、娘式部が親なりと偽り、騙りに参りし不敵な奴、堤の彌三、引立て召されい。

彌三 心得てござる、老ほれめ、下がり居らぬか。

ト引附ける。

洞九 エ、放さつしやれ。

ト振り切る。彌三、爲時支へる。洞九郎、捨ぜりふにて逃げ歩き、思はず時純が方へ駆けよりエ、うるさい手合ひだ。何も怪しい者ぢやアないといふに。

ト思はず時純を見て、膽をつぶし

ヤ、こなさん、爰にござつたか。

ト近寄らうとする。時純思ひ入れ。洞九郎、これに心附かず

モシく、なぜ見ない顔をさつしやるな。コレ、あの手合ひが、わしを爰には置かぬと云ひまするわな。こなさん、あの手合ひに、いゝやうに云つて下さいな。コレ親方

ト云はうとする。時純、刀を抜いて、洞九郎に立ちかゝる。これにてうろたへ、逃げんとして、鳥籠に突きあたり、踏みかへす。この時、鶯飛んで、上の梅の枝へ飛びゆく。時純、抜いて切りつける洞九郎、花筒の梅の枝を取つて打ちつける。誤まつて前の梓火鉢へ入り、バツと煙り立つ。時純、洞九郎を見事に切り倒す。薄ドロくにて、抜いたる白刃へ、誂らへの蜘蛛出て這ひかゝる。上の梅の花散りかゝる。鶯、囀る。保昌、時純が白刃、蜘蛛に目を附ける。時純は、梅ヶ枝の鶯に目を附ける。頼信、左右へ思ひ入れあつて、皆々キツとなる。これより三味線入り、小太鼓の樂、薄ドロくにて、梅の花散る。

時純 ハテ面白き鶯の囀り。筒に生けたる一枝の、火中なしたる煙りと共に、梅の香四方に芬々たり。

頼信 これぞ世に云ふ軒端の梅、名木の薫り。

保昌 抜き放ちたる切尖に、繰りかけて蜘蛛の、白刃の表へ、アレくく

時純 初春の朝毎には來つれども、逢はずに歸る元の古巢へ。

保昌 我が宵子が來べき宵なりさ、がにの、蜘蛛の振舞ひかねて知るしも。

頼信 梅の梢に囀る黄鳥。

保昌 白刃にありく蜘蛛の振舞ひ。

ト振りかへる。保昌、時純が刀をキツと捕へ

保昌 無禮の下郎が

時純 卽座の手討ち。

保昌 血汐に穢れし

時純 刀を清むる

保昌 この花筒の

時純 ヤ。

ト思ひ入れ。兩人キツとなる。鳴り物變つて、保昌、花筒を持つて、時純が白刃へ水をかける。矢張り薄ドロく。手洗ひの手拭を取つて刀を拭ふ。此うち矢張り蜘蛛はあたりへ這ひまふ。保昌、思

ひ入れあつて

保昌 焼刃、金色、劍の鍛え、天晴れ業物。

頼信 正しく蜘蛛切。

時純 ヤ。

ト思ひ入れ。振り切つてシヤンと鞘に納める。ドロ／＼打切る。蜘蛛消える。皆々、思ひ入れ。

案内おしやれ。

保昌 ハツ。

ト唄になり、時純、頼信、若松附いて、二重舞臺へ上がり、奥へ入ると、障子下りる。伏屋、彌三、伊與助、下座へ入る。爲時、保昌残る。

保昌 上使に立つたる室津時純、何とも以て

ト怪しむ思ひ入れ。爲時、側へ寄つて

爲時 保昌どの、娘式部は、何ゆゑ不縁おしやつた。

保昌 こは爲時どの、詞とも覚えませぬ。彼れが越度は安からず、蜘蛛切丸を失ひし、その科ゆゑに拙者が離縁、それとも手が、りござるかな。

爲時 サ、石山寺にて祈念の御劍、失ひしは彼れが越度。さりながら、もし手が、りござるなら

保昌 そりやその時は呼び迎へ、變らぬ夫婦。

爲時 その手が、りはコレ、この繪姿。

ト伊賀壽の繪姿を保昌へ渡す。保昌取つて

保昌 ドレ。

トよく／＼見る。この時、和泉式部出かゝり、窺ふ。

こりやコレ先年高島城にて、落城の節の戦大將、伊賀壽太郎成信、面體しるせし人相書……

ト思ひ入れ。爲時さし寄り

爲時 今の上使が、繪圖面に似寄りたれば、さすれば室津と變名せしか。

保昌 コレ。

ト思ひ入れ。和泉式部、ツカ／＼とさし寄り

和泉 この身の云ひ譯立つ便りの、手が、りなれば、直ぐにわたしが

ト奥へ行かうとする。保昌へだて

保昌 そちや離縁なせし和泉式部、夫の目通り、誰れが許してこれへ参つた。
和泉 エ。

保昌 頼信公を祈念の形代、源家の重寶蜘蛛切丸、失つた不所存者、誰れが許してこれへ参つた。

和泉 サ、去られたゆゑにこの館へ、以前の式部に事かはり、姿も派手な廓の仲居。賤しい姿で参りま
したも、この身に誤まりあるゆゑに、恥かしい下々の取りなり。生さぬながらも娘の小式部、妾
が事を聞きやつたら、さぞや苦勞に

ト思ひ入れ。

保昌 どの、女子のよしない云ひ事ながら、十太丸といふ者、幼少の時よりあなた様が
爲時 隠まひ育つと巷の取り沙汰。

和泉 もしやお前が純友の

保昌 コレ、去られた女房のいらぬ口出し、扣へて居らうぞ。

トきつと思ひ入れ。揚げ障子の内にて

平太 保昌どの、歸られたか。平太有風、面談いたさう。

ト管絃になり、障子上がる。有風、上下衣裳にて立ち身の出。平舞臺へ下りる。

保昌 すりや其許が繼仲公より、發向ありし

平太 物部の平太と申す者。保昌どのには、初めて御意得申せしが、ちと其許に折入つての頼みがござ
つて、わざくと罷り越し、先刻より相待ち居つたて。

保昌 未だ貴殿と某は、知る人にもなりませぬに、拙者への御用とはな。

平太 別儀でござらぬ。離縁なされし式部どのを、身共が挨拶仕る間、なんであらうとこれまでの通
り、一對揃ふ御夫婦合ひ。なんと、聞き届けては下さるまいか。

保昌 ハテ、變つた事に、わざと其許が

和泉 妾が事を、どうしてあなたが

ト平太を見て

ヤ、其方はいつぞや石山にて、逢うたる下部の

平太 郡平でござる。以前は保昌どの、雇ひ足輕、今は平の正盛公のお見出しにあづかり、御覽の通り
の立身出世、名も改めて物部の平太有風、只今にては繼仲公に、この身の仕官。それにつけても
石山にて、折角手に入るあの一刀。

和泉 エ。

平太 アイヤ、いつ出世立身いたさうやら、誠に下世話に申す通り、水と流れと人の行く末。保昌どのとお連れ合ひ、式部どのをこれまでの通り。

保昌 婦妻にせよとお云やるのか。

平太 左様でござる。お氣に入らずと、身共が挨拶。

和泉 妾が事をそれほどまで、心にかける下部の郡平……ア、イヤ、今のお名は物部の平太さま、

御深切なる御挨拶、この身の越度は無理ならねど

爲時 身寄りと申すは異なものなれど、折角平太有風さまの、只今のお頼みなれば

保昌 承知いたしました。初めて逢うた平太どの、離縁の仲を結ぶ仔細はなけれども、貴殿のお詞に付いて

平太 御承知ござらば満足千萬。拙者の詞も立ちまして、忝う存する。

爲時 御深切の段、拙者も喜び。

和泉 これと申すもあなたのお庇。夫の心變らぬうち、ア、コレ、誰れぞ着替へを

ト思ひ入れ。奥にて

主水 奥様のお召替へ。

左門 我れ〜持参

兩人 仕りませう。

ト管絃になり、廣蓋へ和泉式部の襦袢を戴せ、持ち出てくる。

和泉 こりや、其方達は兩人の小姓

主水 御用の趣き承り、持参いたしましたお召替へ。

和泉 コレ、其方衆も、喜んでたもいなう。

左門 さぞ奥様にも、お喜びでござりませう。

爲時 ちつとも早う、襦袢なりと。

和泉 アイ〜。

ト矢張り管絃にて、兩人手傳ひ、和泉式部、襦袢を着る。

平太 すりや、その兩人はお側にて、貴公が使はる、小姓どもとな。

保昌 なかく〜左様。

平太 正しく兩人の其うちに、いづれ一人は十太丸。

保昌 ヤ。

平太 詮議したなら

ト立ちかゝるを、保昌へだて

保昌 アイヤ、平太どの、お頼みゆるに妻の離縁は、貴公に免じ、其まゝ差置きまするが、して、この上にて某に

平太 サ、御夫婦一對揃はねば、ならぬ今宵の儀式ゆる、さてこそ拙者が先へ仲人。

保昌 ヤ、夫婦一對揃はねば

和泉 今宵の儀式と仰しやるは

爲時 して、その今宵の

和泉 儀式とはえ。

平太 周防の内侍のお輿入れ。

保昌 ヤ、アノ、俄に今宵

平太 伴なひ申せし高位の姫君。

ト、向うへ向ひ

お乗り物、これへ。

ト向うにて

大勢 ハア、。

ト管絃になり、麻上下の侍ひ二人先に立ち、鉦打ちの女乗り物を擔ぎ、同じく麻上下の侍ひ一人跡に付き、ツカくと來り、下の方に屯るする。

保昌 すりや押しかけて今日今宵、周防の内侍の俄の輿入れ。

和泉 それゆるこそは夫婦一對

平太 揃ふ今宵の侍女郎。これと申すも先刻より、伴ふ周防の内侍さま、御輿の内にてさぞや御氣儘。

ト乗り物に差寄り

即ちこれが頼信公の御殿。イザく、これへ。

せん そんならそこへ、出ようわいなう。

ト合ひ方になり、駕籠の内より三日月お仙、十二單衣、緋の袴にて、扇を持ち、ツカくと出て通らうとする。平太、袴の裾を扣へ、思ひ入れあつて

平太 コリヤノ、侍ひ中には、溜りへ參つて扣へて居やれ。

侍ひ ハッ。

ト供廻り残らす乗り物を鼻かせ、引返して向うへ入る。

保昌 ちは存じがけなきお興入れ。この保昌、當惑仕つてござります。

和泉 妻のわたしも、思ひがけないこのお目見得。

為時 即ち式部は拙者の娘。身は敦賀の郡司爲時、好い折柄に居合せ申した。

保昌 源家の執權、平井の保昌、この上ともにお見知り下さりませうなれば、有り難う存じ奉ります。

平太 内侍さま、お詞を遣はされませう。

せん エ。

トそこらをキヨロ〜見廻す。

平太 イヤサ、内侍さま、如何いたした儀でござる。先刻も申します通り、お詞をナ、ソレ、保昌夫婦へお詞を、ナ、遣はされませうぞ。コレナ、お近附きの爲め、お詞を下されませうぞ。

トいろ〜に思ひ入れ。お仙、こなしあつて

せん ア、モシ、お屋敷さん、初めて逢ひやしたね。お近附きの爲。

ト懐中より紙を出して投げてやる。保昌、合點のゆかね思ひ入れ。平太、心遣ひあつて

平太 これはしたり、その儀ではござりませぬ。ハ、ハ、ハ、ハ、こりや大方お乗り物の内にて、上氣遊ば

されたと見えます。左様でがなござりませう。サア〜、あれへ入らせられませう。お小姓力

お梅の御用意。

ト上の方へ梅を敷く。左門之助、結構なる箕盆を直す。

和泉 イザ、まづあれへ。

ト思ひ入れ。お仙、ズツと行つて、梅の脇へ坐る。平太、これを見兼ねて

平太 これはしたり、昨夜あれほど教へて置いたに

トうかく〜と云つて

アイヤ、常々御存じでありながら、今日に限りて、なぜお梅の上へは……………ナ、ソレ、お梅とはナ、蒲團の事、ナ、アイヤ、お梅の上へ、早うお坐りなされませい。

せん エ、蒲團かえ。立派な裂れだなう。カウ、枕が二つ無えよ。

平太 エヘン〜。

ト咳にて紛らす。

保昌 ア、誠に繼仲公の御息女ほどあつて、初々しう思ひ召すは御尤も。御館より外、御歩行とても興

トお仙へ目を附ける。

和泉 成る程、お心の結ほれたも、こりや御尤もでござりまする。何事に依らず私しへ、萬事お心置きなう。

ト側へ差寄る。此うちお仙、真を吸ひつけ

せん お慮クながら、サア

ト長煙管を和泉式部へ出す。平太、思ひ入れあつて心遣ひのこなし。

三十二は、のめねえなう。さう云つても、酒むしは氣障だよ。

平太 エヘンくく。

ト思ひ入れ。

和泉 有り難う存じ奉りまする。

せん コレ。のんで見ねえ、いつそ舌に當るよ。

和泉 ナニ保昌どの、内侍さまのお興入れの由、頼信公へ申し上げ、御祝言の御儀式を、御用意申しませうか。

保昌 いかにも、我が君へは保昌、直々に申し上げる間、爲時どのと式部兩人は、平太どのを一問へお伴ひ申し、よきに響應いたされよ。内侍さまのお側には、保昌附添ひ罷りあれば、氣遣はずとも其方は奥へ。

和泉 畏まりました、イザ、平太さま、御同道仕りませう。

平太 すりや拙者を、周防の内侍の、お側には置かぬぢやまで。味にひねつた……ようござる。別間へ同道おしやるなれば、さしづめ兩人の小悴を

ト兩人にかゝる。和泉式部へだて

和泉 ハテ、お側仕への小姓どもを

主水 御用とあらば何時でも

左門 お手鳴らされい

兩人 お客人

平太 ハテサテ立派な。いづれ一人は十太丸。

保昌 ヤ。

平太 アイヤ、内祝言まで暫く休息……内侍さま、拙者お側に無きうちは、必らずともに、お含み

でござりませうな。

せん オット、承知之助。

平太 ア、コレ、そこを物事尋常に

せん エ、しつこいぞヨウ。

保昌 有風どの

平太 保昌どの

爲時 御同道いたさう。

平太 正しく一人は

ト寄るを、和泉式部へだて、子役へ

和泉 お供申しや。

兩人 ハツ。

ト唄になり、平太、爲時、主水、左門之助、和泉式部附いて奥へ入る。あと合ひ方になり、保昌、お

仙へ目を附け、思ひ入れあつて

保昌 ア、誠に今日はいかなる吉日やら、思ひがけなき周防の内侍のお興入れ。俄の儀と申し、御用意

仕らず、不調法なる取まかなひ、さぞかし御待ち久しう思し召されませう。

せん アイ、待ち遠なら、一遍廻つて来ようかね。

保昌 アイヤ、最早頼信、これへ参るに間もござりますまい。サ、コレ、御氣鬱なきやう、何なりとお

慰みが……何を申すも武骨の某……イヤ、失念仕つた。この程は早咲きの梅ケ枝、

早速頼信へ送り下され、殊ない喜び、殊に内侍さまのお歌、頼信も感心仕つてござります。あ

のお歌は、何と申しましたな。

せん ナニ唄だえ。そり唄かえ。

保昌 アイヤ、あのお歌の心の儀でござる。

せん あの唄の心は、なにサ。「ちよつとくに頼まれて、もう簪はこればかり」サ。

保昌 これは珍らしい歌を承りました、先つ頼信さまより、内侍さまへ送りましたる詠歌は、慥か

斯様でござりました。我が袖の涙に宿る影とだに、知らで雲井の月や澄むらん」と記して送りま

した。その節、内侍さまのお返し歌は、慥か「さそふとも、我が袖にのみ」とやら、下の句は、

とんと失念仕りました。

せん ヘエ、誘ふともとは、あやまるなう。大方それも小指が、水を向けたのであらうの。

保昌 如何ござりますやら、して、内侍さまには、主人頼信を
せん オヤ、好かねえなう。

ト保昌、思ひ入れあつて

保昌 ハテ、何とやら内侍さまの詞の端、下様の女に等しき振舞ひ。こりやどうでも
せん エ。

保昌 爰な内侍の紛れ者めが。

せん エ。

ト惻りする。この時、國平出かゝり、窺ふ。

保昌 心を附けて見るところ、合點のゆかぬ立振舞ひ。よもや誠の内侍ではあるまい。察するところ紛
れ者、有やうに、素性を申せサ、

せん ア、モシ、どうして。

保昌 御身ばかりが企みではあるまい。こりや頼み手がなくては叶はぬ。サ、有體に申すまいか。
せん サ、それはな。

深昌 その頼み手を白狀せぬか。

せん サア、それは。

保昌 サア〜〜。

せん エ、コレ、いつそ氣が揉める

ト下の方へ逃げようとする。國平立ちふさがつて

國平 ドツコイ、爰は動かさぬ。内侍と偽り入込む女子、仔細ぞあらん。保昌さま、必ず御油断なされ
まするな。

保昌 女ながらも高位のお方と、偽はる曲者、頼み手あらん、吟味いたせ。

國平 畏まりました……サア、頼み手を云ふまいか。

ト立ちかゝる。

せん ア、モシ〜、滅多な事をしなさんな。お屋敷さん、斯う手があがるからは、云つてしまふわ
な。成る程、わつちやア誠の内侍さんとやらぢやアねえわな。

保昌 さてこそ。して、其方は何者にて、何奴に頼まれた。

せん アイ、聞かれて話すも、お里が知れてあやまるがネ、云はにやア道行が解りやすまい。わつちや
ア、アノ、香堂前に苦界して

保昌 浮れ女、遊女の類なるか。

せん アイ、マアそんなものサ。夜を晝にして忙しい勤め、情を賣つて世を渡る。國平して、われが名は何と云ふ。

せん アイ、香堂前の長屋で、路地を入つて二軒目の、異名を取つた三日月お仙とは、わつちが事サ。

保昌 すりやアノ其方は。ハテナア………して、お仙とやらは、何者に頼まれて、當館へは入込んだぞ。

せん サア、その譯は、わつちを連れて来たお屋敷さんが、親方へ立て金して、内侍さんになつてくれろとの事。別してむづかしい話し合ひでもない上に、切りを叩かせさへしなさらずば、出鱈目にやつて見ようと、長屋の勤めを引くが嬉しさ、お先眞暗で来たといふものサ。

保昌 すりや、身請けされて參つたのか。

せん アイ、身請けといふも氣が強いがネ。モシ、免しておくれ、わつちやア年が明いたら引取らうといふ、女房約束した、源さんといふ男のある身。アノマア勿體ない、頼信さまとやらを騙して、理屈の悪い一つ寢をする話があつては、第一源さんに立たねえわな。切りを叩いてその上に、野玉を稼ぐ法もあれ、源さんと三尺店でも持たねえぢやア、どうも達引の悪い事があるのサ。

保昌 こりや的切りと讒者の計らひ。頼信公には、傾城若松に御執心、殊に御身の越度へ附けこみ、似せ者の内侍を拵らへ、頼光公と不和になし、誠の内侍を正盛どのへ、送らんといふ、こりや、計略に極まつたわえ。

せん 何か外のいさくさは存じやせぬが、モシ、譯が解つたら、どうぞ歸しておくれな。

保昌 氣遣ひいたすな。その身の科にはせぬ。さし當つて掛り合ひの女、當館に暫らくとめおき、頼みたい仔細もあれば

せん そりやマア、何の頼みだえ。

保昌 其方は存ぜぬ事ながら、我が君には、傾城若松といへるをお館へ召され、日夜の寵愛。彼れを遠ざくるには、幸ひの其方、矢張り内侍と偽はつて、頼信公へ差上げ置かば、佞人どもが企みの裏を搔く道理、矢張り一杯くつた振りにて、只今より保昌が、改めて其方を頼む。どうぞ暫らく内侍と偽つて

せん エ、そんならわつちが、化の皮の現はれた事を、あのお屋敷さんへ沙汰なしに、今からお前が改めて、内侍さんになつてくれと云ひなさるのか。

保昌 いかにも左様。

せん ようござりやす。どなたにも斯うしてあけるが、わつちが商賣もう少つとの事なら、内侍さんになつて居やせうが、聞けば興入れとやらの晩には、是非殿様と一つ寝をするものと聞きやした

保昌 氣遣ひ致すな。身が請合うて、頼信さまと寝させはせぬ。

國平 役目勤めたその跡では、おぬしが思ふ男にも

せん 世話をしてくんなさるか。

國平 そこは奴が請けこんで

せん エ、有り難うござりやす。

保昌 猶この上は、役目が大切。必ずともに仕損じまいぞ。

せん 呑みこみやしたが、内侍とばかり云へばいゝかえ。

保昌 ハテ、我が君に逢うた時、内侍と云ふの忘れまいぞ。

せん 承知しやした。

保昌 然らば奥へ同道いたさう。内侍の御方。

せん お屋敷さん、首尾よく行つたら

國平 思ふ男に

保昌 添ふ心か。

せん 添はいでどうせう。

保昌 刀にかけて。

せん 詞は

保昌 金鐵。

せん 必ずともに

保昌 其方は周防の

せん 内侍でござる。

ト管絃になり、お仙先に保昌附いて奥へ入る。國平思ひ入れ。

國平 ハテ、合點のゆかぬ。内侍を伴ふ平太有風、素性の詮議が

ト思ひ入れ。奥にて人音するゆゑ

ソレ。

ト管絃になり、下の菘垣を押分け、窺ひく入る。矢張り管絃にて、若松、駈けて出るを、光遠、追

ひ駈け出で、あちこち捨ぜりふにて追ひ廻し、キツト捕へて

光遠 コレく、太夫。そりや酷いぞよ。これサく。

若松 エ、又しても光遠さん、わたしや今日爰へ召されたは、お前も知つて居やしやんす通り、頼信さんの

光遠 サア、主人の頼信の揚げといふ事は、存じて居る大宅太郎、ハテ、賣り物は買ひ物、そもじが主人の奥方ではあるまいし、野守の里の若松太夫、惚れて通うた大宅の光遠……アイヤ、大宅だといつて、家主ではないよ。矢張り侍ひ。コレ、二本差して居るぞ。主人も惚れて通ふなら、家來も惚れて通ふのだ。主が通へば家來が通ふ。家來が通へば主が通ふ。コレ、いつまで云つても同じ事だ。少しは情を知り給へ。

ト若松に抱きつく。

若松 エ、おかしやんせ。家來の身として主人の相方、この若松に阿房らしい、なんとマア、抱きついて

光遠 イヤくくく、若松太夫ぢやによつて抱きつくのぢや。ハテ、定紋は抱き若松、すりや、そもじの方から若松に抱きつけといふ、看板打つたぢやアござらぬか。そこで身共も、抱き若松々々。

若松 エ、故しなさんせいなア。

トいろく争ふ。よき時分より平太、箕盆を提げ、出かゝり居て、これを見かけ、光遠を引きのける。

光遠 コレく、さう情なくはせぬものぢや。

ト平太を見て

ヤ、其許は平太有風。こりや、身共が戀の妨げを、なぜおしやる。コレサ、貴殿に於ては、身共には大恩ござるぞ。その某へ、なぜ妨げを

平太 イヤ、貴殿の戀の妨げは致さぬが、身共が今日この館へ發向なせしは、かねての内談、下々の女を内侍に仕立て

トあたりへ思ひ入れ。若松、平太を見て、こなし。

あの頼信めに娶合せ、誠の内侍は、これを種に縁談を變替へ、かねて御心をかけられし、正盛どのへ差上けんと、拙者が計らひ。

光遠 サ、その目論見は身共も承知。筋目賤しき女を引込み、放埒惰弱と云ひ立て、頼信を押し片附けよと、頼親公よりお指圖……コレく、花魁、頼信どのの内侍と、今宵夫婦の新枕、太夫も我

れらと新枕。コレ、氣は中村の太夫さん、ちよつと爰らで、抱き若松々々。

ト寄り添ふ。

若松 エ、おきなさんせいな。内侍さんはありや、表向きの奥様、眞實の女房といふは、この若松ぢやわいなア。

平太 コレ、若松とやら、そりやア悪い合點。周防の内侍は身が同道して、頼信の北の方。腹を立ちやるな、其方は賤しき傾城の身で、武將の弟と、どうして連れそふ。

ト顔を見る。

若松 ヤ、其方は景道。

平太 アコレ、云うては悪いぞ。ナ、モシ、無念でござらう、サ、殘念でござらうが、そこが世の浮き沈みといふものだ。

若松 エ、マア、其方は、ようも、わしを

光遠 これサ、太夫、大分氣を揉むなく。

若松 これがマア腹が立たいで

ト立ちかゝる。

平太 サ、尤もでござる。あなたの、イヤ其方のナ、その戀人の頼信へ、周防の内侍を伴ひ來りし身共ゆゑ、腹が立たう、こりや尤もぢやが、爰で云つては物が無い。必ず恨みを、ナ、コレ、云うては悪いぞ。

トいろく思ひ入れ。

若松 エ、マア、其方はなう。

ト腹の立つ思ひ入れ。

平太 サア、尤もだ、腹が立たう。あの内侍は、今宵俄の興入れ、こりや腹の立つは尤も至極。いつそそもじは面當てに、あの光遠どのへ

若松 エ、知らぬわいなア。

光遠 成る程、こりや平太どの、お云やるが尤も。とても叶はぬ頼信へ、心中を立てようより、我れらへ河岸を變へるが、ナウ、有風どの。

平太 左やうく、御執心なる傾城若松、身が執持つて進上いたさう。

光遠 それは重疊、何分身共へ色よい返事を

若松 なんの、いらざる執持ち顔。何は差をき、恨みの數々。

ト立ちかゝるを、キツと留め

平太 ハテ、その恨みは頼信どの、尤もなれども女の嗜み、殊に浮れ女遊女の若松、娘子供か何ぞのやうに、コレ、餘人の思惑、ナ、コレ、何かは身共が胸にある。

ト若松を心遣ひにて留める。若松サツと思ひ入れ。光遠、これを知らず

光遠 成る程、貴公の詞の通り、野暮に腹を立てぬがよい。ハテ、相手のない事か、そもじには身が首たけ、そもじの顔は身が立てる。オ、頼信への面當ては、身共が色になつてやらう。あまり力を落さぬがよい。ナウ、有風どの。

平太 左様々々、この若松は身が預かり、口説き落して、貴公へ返事を

光遠 萬事よろしう頼み入る。然らば何分、貴公の執持ち。

平太 色よい返事を

光遠 相待つ、若松。

トしなだれる。若松振り切る。

抱いて寝松としたいなア。

ト唄になり、嫌らしき思ひ入れあつて奥へ入る。若松思ひ入れあつて、すんと立つて平太を引附け、

酔懐はせ

若松 エ、おのれはなう。

平太 御尤もでござります。

若松 コレ、マア、誰れあらうぞ。父は九州にその威を振ふ、藤原の氏、朝敵なれども純友が娘の玉琴年端もゆかぬ自らを、九條の里へ連れゆきて、思ひがけなき勤め奉公、いま淺ましきこの姿、君傾城に沈めしも、みんな其方がなせる業。ようマア其方は自らを、浮川竹に沈めやつたなう。

平太 御尤もく。主君の娘に勤めをさせるも、時世につるれば是非がない、なるだけ養育いたさんと心は逸れど浪々の、殊にあなたの弟君、御幼少の十太丸さま、お顔知らねば主君の片割れ、尋ね申さん其ために、路川にせんと勿體ない、お前を騙して廓の奉公。それを元手に所々方々、若君尋ぬる旅立ち、京都にさまよふ其うちに、正盛どのへ取入つて、立身出世のこの景道、承れば玉琴さま、頼信どのと云ひ交しござる由、これ幸ひ、拙者とても、主人の敵は頼光一家、近寄らんには屈竟の、今日只今お目にかゝるは、主君の導きたまふところ、何卒御身頼信に近寄り、この景道を手引きさつしやい。父御の敵、頼信兄弟、首引ッ提げん、玉琴さま、手引きさつしやる心はないか。

若松 すりや、頼信さまを討つ手引きを、アノわたしにせいと云やるか。さりながら、云ひ交したる頼信さまを、どうしてマア

平太 討たねば親御へ立ちますまい。あなたを賣つて金にしたも、斯ういふ手蔓にしようばかり。なんと忠義な御家來でござらうがな。

若松 そんならどうでも、手引きせにや

平太 ハテ、爰で逢うたが天道の、お引合せと思し召し

若松 お居間近かう

平太 手引きさつしやい。さもないと、不孝者になりませうぞよ。

トきつと云ふ。若松、思ひ入れあつて

若松 そんなら其方の勧めに任せ、頼信さまの御寢所へ。

平太 必ず手引きを、玉琴さま。

若松 長尾新六景道。

平太 コレ。

ト思ひ入れにて、片頬にてニツコリと笑ふ。これをキツカケに唄になり、平太思ひ入れあつて奥へ

はひ
入る。

若松 思ひがけない今の頼み。殊に内侍の今宵の興入れ。所詮叶はぬわたしが願ひ、父の仇とはいふもの、頼信さまをどうしてマア……ア、辛氣な事ではあるわいなア。

ト思ひ入れ。揚げ障子の内にて

頼信 「遠近の、梢かすめる曙は、いづくともなく梅の香ぞする」

若松 ヤア、ありや我が君様

頼信 誰れぢや、何者ぢや。

ト唄になり、揚げ障子があがる。内に頼信、褥を敷き、脇息にもたれ、後に腰元三人扣へ、銀の燭臺二つ立て並んであり。頼信、若松を見て

それに居やるは、大夫ぢやないか。

若松 アイ、さうでござんす。

頼信 これはしたり、この寒いに、何をして居やるのぢや。

若松 アイ、見なさんせいなア、あのお庭に咲いた紅梅の花、匂ひ盛りのあの景色。

頼信 それく、そこに居やつたか。幸ひく、頼信も最前よりの上使のもてなし、あまり氣鬱いたし

たゆる、眺めようと思ふ最中、予もそれへ参つて附合はうか。コリヤ、女子ども、あれへ褥を持て。

四七六

女三 畏まりました。

ト合ひ方にて、頼信、平舞臺へ来る。腰元三人、褥と脇息を好き所へ直す。

頼信 時に太夫、この間から其方を、この館へ引寄せての揚詰め、何なりと心に叶ふやうには思へども、廓と違つて不自由勝ち。殊にどうやら浮かぬ顔ぢやが、氣合ひでも悪いのか。

若松 アイ、エ、わたしや何ともござんせぬわいなア。

頼信 ア、何ともないか。ハテ、どうやら浮かぬ顔の色、皆の者、さうではないか。

腰一 左様でござります。見ましたところが浮かぬ顔。

腰二 定めてこの冷えまするので、御持病が起りましたといふやうな事でござりませう。

腰三 お藥など用意いたして参りませうかいな。

若松 イエ、必ず構つて下さりますな。わたしや何ともないわいなア。

頼信 コレ太夫、さう云つてもいつにない顔。なんぞ又外に、心の揉める事が。

若松 アイ、ござりまする。心の揉める、腹の立つ事があるわいなア。

頼信 これはしたり、腹の立つ事とは、どのやうな事ぢや。

若松 アイ、今宵興入れしなさんした、内侍さまの事で

頼信 ヤ、何と云ふ、この館へ、周防の内侍が、興入れあつたと申すのか。

若松 エ、まざくしい、あの顔わいなア。

頼信 イヤ、眞以て内侍の興入れ、予は存ぜぬ。コリヤ、女子ども、其方達は知らぬか。どうぢや。

腰三 ハイ、先程周防の内侍さまが、御内々にてお興入れ、保昌の計らひにて、奥殿にお出で遊ばしませるわいなア。

トこのあたりに伏屋、お仙を伴ひ、二重舞臺に出かかり、遊ばし居る。

頼信 ヤア、内侍の興入れありし事、予に物語らぬ保昌の胸中、何とも以て心得ぬ。ドレ、直々参つて

ト行かうとする。若松支へて

若松 イエ、やり申す事はなりやんせぬ。さう云ふお前が悪性ぢやもの、どうしてマア、奥へうかうか

頼信 ハテ、頼信は知らぬが定。内侍の入來を、保昌に逢うて

四七七

若松 イエく、其やうな事を云うて、内侍さんに逢ひに行かうと思つてかいなア。やる事はならぬわいなア。

頼信 ハテ、疑ひ深い。ちよつと爰を

ト行かうとする。若松、下の方へ引分けて入る。この争ひを上にてお仙見て居て、同様にあちこちと思ひ入れあり、平舞臺へ下りて來り、頼信が手を取り、奥の方へ連れて行かうとする。若松、捨ぜりふにて、下の方へ連れ行かうとする。この仕組み二三遍、あちこち引ッ張る。伏屋はじめ腰元三人、同じやうに、この跡に附いて廻る事よき程あつて、ト頼信、お仙を見て

頼信 ヤ、この女子は

伏屋 我が君様とお云ひ號けのありし、繼仲卿の御息女。

せん 内侍でござる。

頼信 ヤ、なんと。

伏屋 思ひがけなう俄のお輿入れ。その附き人は物部平太有風どの、あなたが即ち大内より、勅命下りし

頼信 すりや、繼仲卿の息女たる、いよく周防の

せん 内侍でござる。

伏屋 我が君、日頃九條の傾城、若松どのにお通ひなされると、上への聞え。それゆゑにこそ推しての輿

入れ。

若松 そんなら、わたしが事を、お上にて聞かしやんして、それゆゑ俄に御婚禮なさるのかえ。エ、

アタ阿房らしい。コレ、女中さん。いよく頼信さんと云ひ號けの、お前が周防の

せん 内侍でござる。

若松 エ、阿房らしい。

頼信 コリヤ、太夫、扣へて居や。何を云うても大内よりのお指圖。無禮ないやう……イヤ、内侍どの

には、不思議にもこの縁談。この上とても

せん ほんに、初めてお目にかゝりやした。いつそモウ、わつちやア何にも知らねえ。さう思つておくれよ。

頼信 ハテ、内侍どのには、聞き慣れぬ詞使ひ。ア、誠に殿上人ぢやなア。

せん ナニ、天井を見せつけるえ。

伏屋 アモシ、左様な御挨拶では

せん いつそ自烈てえヨウ。

頼信 ハテ、見ると聞くとはきつい相違、さりながら、一旦宣命下りし上は、祝言のまねび、何かの儀式、伏屋は用意仕れ。

伏屋 畏まりました。女中方は、わたしと一緒に……内侍さま。

三人 後程お目見得 仕りませう。

ト管絃になり。伏屋に腰元三人付き、奥へ入る。若松、跡見送り

若松 これいなア。祝言の用意ぢやの何のと、阿房らしい。そんな世話して下さんな。

頼信 ハテ、祝言のまねび、島臺長柄の用意いたさにやらぬわいなう。

せん 長柄とはえ。

頼信 内侍どのと某が、杯ごとの銚子土器。

せん ヘエ、酒かえ。モシ、酒なら砂こしを一升取りにやりなよ。

頼信 これはしたり、内侍どのには、はしたない

ト思ひ入れ。

誠に、今宵内祝言でも致すからは、打くつろいで心置きなう。客心あつては睦まじうならぬもの。さう思うてくりやれ。

せん なにサ、客心の何もかもいらねえわな。ハテ客人は四つ限りサ。わつちやア泊りは取らねえよ。

頼信 ハテ、珍らしき事を云はるゝが、それが彼の大内にての、大和調でござるよな。

せん ナニ、大和屋は杜若の家名サ。

若松 エ、何ぢややら、お公卿さんの娘御にしては、ほんにきついお轉變者。それでもお前は、アノ

周防の

せん 内侍でござる。

若松 エ、呆れるわいな。わたしが前で遠慮もなう、主の奥さんにならうといふ、いよくお前は、

アノ周防の

せん 内侍でござる。

頼信 ハテ、夥しい内侍ぢやの。コレ、太夫、どうでも雲井に近き高家の姫君、また格別のものぢやわいの。

若松 おかしやんせ。たとへ内侍さんでも、わたしを退けて、頼信さんの奥さんには、アイ、わたしがならぬわいなア。

せん イ、エ、よしてもおくれ、わつちが来ては、さうはならないよ。

若松 ならうが、なるまいが、わたしも廓で勤めの身。お公卿さんの娘御ぢやというて、自由にさせぬが傾城の意氣地。主はわたしが貰うたぞえ。

せん イ、エ、やる事はならねえよ。貰ふの貰はぬのと、四六屋體の若い衆ぢやアあるまいし、いつそ面倒。殿さん、斯うしねえ、あの子とわつちを、廻しにしねえな。

若松 イエ、お前に見替へられては、わたしや廓中へ立たぬわいな。

せん エ、お前は廓中へ立つまいが、わつちは長屋中へ立たねえわな。廓々と御大層な。好かねえナウ。

若松 そりやモウ、御所方と違うて、上品ではござんせぬわいなア。

せん なんだ、上品だの茶瓶だのと、嫌味を云ひなさんな。エ、あんまり安くしねえものだよ。

若松 なんてあらうと、主の側へ置く事はならぬわいな。

せん イ、エ、わつちやア内侍だによつて、退かれねえよ。

若松 退きなさんせ。

ト若松は煙管、お仙は檜扇を叩き立て、争ふ。頼信、兩方を留めて廻る事あつて、争ふはずみに、お仙の衣裳脱げて、切り見世女郎の形になる。頼信見て

頼信 ヤ、内侍どのよこの姿。
せん エ。

ト思ひ入れ。

若松 さもしい形は。

頼信 ハテナア。

ト思ひ入れ。お仙、俯向く。この時、向うにて

侍ひ 下がれくく。

トてんつゝになり、向うより源六、前幕の形にて出て來り、跡より菖蒲革の侍ひ三人、棒を突き、附いて出て來り、花道にて

侍ひ 下がれく、下がらぬか。

源六 やかましいわな。わしやア魚屋だから、下がれくは禁物だよ。ついに下がつた魚に賣らねえよ。

ほんの事だが小口もきいて、はした喧嘩の濟み濟ましもある、三田の源さんだよ。呆れた手合

ひだ。

侍ひ 慮外者め。下がらぬか。

トてんつゝにて本舞臺へ來り、源六、お仙を見て

源六 オ、そこに居るのは、お仙ぢやアねえか。

せん オ、源さんか、よく來てくんなすつたの。

源六 聞きやれな。おぬしを昨夜、この屋敷へ寄越した事を、あの小振めらが宿六に同じやうに、びりな事を吐かすから、彼の金で道行を付けても、まだ強情を吐かすから、そんならいゝワ、お仙を連れてくべいと、剛敵に空を云つて來た。サ、用が仕舞つたら早く來や。

侍ひ ヤイ、我が君の御前とも憚らず、素町人め

三人 下がらぬか。

源六 ハテ、やかましい手合ひだ。靜かにしねえな。そして、野暮な聲だぞ。したが、なんと云ひなさる、我が君様だえ。そりやア殿さんの事かえ。イヤ、そいつは、とんだ話した。

ト肩の手拭を腰に挟み、揉み手をして

ハイ、御免なされませ。お前様が、このお屋敷の殿様でござりまするか。私しがこれへ上がりました仔細は、なんでござります、お話し申せば、悪い理屈でござります。ハイ、御免なされませ……おきやアがれ。白癡が錢湯へ入るやうだ。

ト頼信、思ひ入れあつて

頼信 イカサマ、様子のありさうな町人。予が一通り聞いてとらさう。下部ども、苦しうない、其方達は、罷り立て。

侍ひ ハア。

ト下手へ入る。

頼信 時に町人、どういふ譯で其方は、この館へは參つたぞ。サ、どうぢや。

源六 ハイ、御免なされませ。左様なればその仔細を、お話し申せば、高が斯うでござりやす。その女はお前、三日月お仙と云つて、香堂前で切りを叩いて居りやした。私はお前、魚屋の源六と申して、ほんの事だが、若い手合ひにも立てられやすし、有り難い事には、御近所の衆にも、あんまり憎まれた事のねえ生れでござります。こりやハヤ不思議な御縁で、お近附きになりやす。モシエ、我が君様とやらえ。お前さん、芝居へもお出でなすつて、ネモシ、喧嘩でもしなすつたら、わつちが所へ人を寄越しなさいやし、そこは又、源六でござりやす。まんざらあなたの凹むやうな話しもござりやすめえ。モシ、ちつとお遊びにお出でなさりまし。

頼信 イカサマ、人品骨柄、イヤモウ、勇ましい男に見ゆるわえ。

源六 イヤモウ、ぞんざい者でござりやす。お頼み申しやす。へ、へ、へ、。時にモシ、我が君さまとやらえ。お聞きなさいやし。あの香堂前の長屋へ、アノお侍ひがネ、モシ

ト小判の仕形をして

れこを持つて来てネ、雇つて行かれました。

せん その行く先を何處と聞けば、頼信さまのお館へ、わつちを周防の内侍になれと、立派な襦袢を着させた上、お聞きな、ついぞねえ替へ玉に雇はれて来やしたよ。

若松 そんなら、アノ、内侍さんといふは嘘かいなア、殿さん

頼信 成る程、それで様子が皆知れた。その女こそ、雇はれ者の内侍の似せ者。

若松 それでわたしも落ちついた。とはいへ、あなたが、ほんまの内侍さんなれば、お前はしつほり帯紐解いて

紐解いて

頼信 なんの、其方を側に置いて

若松 嘘ばつかり。

頼信 弓矢八幡、刀にかけて

若松 そんなら眞實

頼信 偽り云はうか。

若松 我が君さま。

頼信 太夫。

若松 オ、嬉し。

ト頼信に寄りそふ。源六、お仙と顔見合せ、思ひ入れあつて

源六 お仙ほうや。

せん 源さん

源六 とんだお長屋へ越して来た。成る程、大將といふものは氣紛れなものだ。お屋敷内へ女郎衆を引込んで、朝も晩も引附けて置きなされるは、モシ、お殿様え、憚りながら少つとお身のお爲めになりやすめえよ。マア第一、町人の息子手合ひでさへ、女郎買ひが好きぢやア、親兄弟に勘當され、揚句の果は友達の居候ふ。まして大將のお前様が、氣紛れで御覽じろ、ざつと天下が治まらねえといふものだ。お慮外な申し分だが、魂ひを臍の下へ、しつかりと落ちつけて、御思案が肝腎でござりますねえ。

頼信 これは、初めて逢うた町人の源とやら、頼信への意見、悪うは聞かぬ。誠に深切の段、過分に思

ふぞ。

源六 そのお禮で痛み入るやつサ。ハ、ハ、ハ。

せん コレ、源さん、ぬし達の事は、お前が出る幕ぢやアねえわな。人さんの事ばかり、お前、あんまり情がねえよ。

源六 古道具屋の長持ちやアあるめえし。

せん エ、無駄どころぢやアねえわな。なぜ今朝早く来てくれねえ。

源六 ハテ、おれだといつて、隙人ぢやアねえワ。商賣が魚屋といふものだから、朝がいつち忙がしい。

せん なんだな、お前も解らねえものだよ。

源六 何が解らねえ。

せん お前の仕打が。

源六 おきやアがれ、打つちやつて置きやな。

せん イ、エ、置きやすめえ。人さんの事に構はずと、なぜわつちが渡り引きを附けて、引取つてくんなさらねえ。

源六 ハテ、てめえも、しちくどい者だ。おらア知る通り、噂は無し、親仁も阿母もない獨り身だワ。

渡り引きさへ濟めば、おれが内へ連れて行つて、ソレ、大家さんも承知だワ。清八が噂を頼んで、長屋を一遍廻らせる分の事だワ。引越し女房同然と思やア、いさくもねえわな。

せん それに違ひねえのか。コレ、眞面目だよ。

源六 よしサ。

せん 近所へ顔を出すにやア、あの結城縞の半襟を、掛け直すがい、なう。

源六 よしサ。

せん そんなら、忘れねえうちに、斜子の半襟を買つて掛け直すから、早く買つて来てくんねえ。

源六 よしサ。

せん カウ、騙すとお前、取りつくによ。

ト寄りそふ。

源六 怖いなう、コレ、くされはねえわな。

ト頼信、これを見て

頼信 イヨク、大和屋に大和屋、くされはねえ。

源六 モシク、我が君さまとやら、無駄を云ひなざるな。

頼信 イヤ〜、これは、くされはないと見えるわえ。どうでも商賣が魚屋、くされはねえのサ。憚りながら、ちつとお身のお爲めになるまい。ハテ、女郎買ひが好きぢやア、親兄弟に勘當され、揚句の果には居候ふ。お慮外な申し分だが、魂ひを臍の下へ据ゑて、よくしつかりと落ちつけて、御思案が肝腎でござりやすにえ。

源六 モシ〜、旦那、そりやア悪い。無駄だ〜。

頼信 イヤ〜、今も今とて某へ意見、きつと承知仕つた。

源六 こいつはあやまるね。併し、大將様に、意見ぜりふを云はれるだけ、ほんの事だが、わつちだと云つて、まんざら腹からの町人ではござりませぬ。

頼信 して、其方が素性といふ、侍ひの證據があるか。

源六 ハイ、親仁の書いた遺言狀がござりやす。

ト懐より守り袋を出し、見せる。

頼信 その品、これへ。

ト書き物を取つて、よく見て

さてこそ、満仲公に仕へたる、三田の仕と云ひし者、残し置くこの遺狀。かねぐ、兄君頼光公の

御物語り。聊かの誤まりにて、勘當受けて漂泊なし、武藏の國にて歿りしと聞きつるが、さては其方は、三田の仕が倅よな。

源六 ヘ〜、左様なら私しが親仁は、あなたの御父、満仲さまの御家來。左様なれば私しが爲めには、

頼信さまは旦那筋、私しは家來でござりますか。

頼信 いかにも。

源六 そいつは、とんだ話したワ。

頼信 さるにても、心得難きはそれなる女、何ゆるあつて、内侍と偽はり参りしぞ。

せんサ、それは、お話し申せば長い事。これへ参つた一通り

トこの時、奥にて

保昌 それなる内侍が身の上は、保昌参つて、申し上ぐるでござりませう。

ト管絃になり、保昌、上下に改め、臺に掛けたる刀掛けを持ち、出て来る。

頼信 其方は平井の保昌、内侍が身の上語らんとは。

保昌 先刻俄に内侍の奥入れ、合點ゆかずと存するゆる、身許の詮議いたせしところ、案に違はぬ讒者の計らひ。附添ひ来りし平太有風、彼奴髭黒の廻し者、事荒立てなば、奥には上使の入來と申し

何氣なう平太を留め置き、下々の女を内侍と申し、あなたへわざと差上げしも、若松どのと君の御仲、裂かん爲の拙者が胸中。君にもそれなる傾城を、身請けなされてお館に置き給ふも、殘黨詮議のよき人質。

若松 エ。すりやアノ、わたしを

頼信 さとくも容せし其方が詞。予が放埒のその起り、推察なして満足せり。して、拱へし一腰は。

保昌 ハツ、あれにて様子承れば、その町人こそは、源家譜代の仕が倅、お目見得いたせしこそ幸ひ、世になき仕が勘氣御赦免遊ばされ、その倅たる町人を、君の臣下となし給は、草葉の蔭の仕が喜び。只管御推舉仕りまする。

頼信 其方が申す一條、兎角は好きに計らへ保昌。

保昌 ハツ……コレ、聞きやつたか町人、この保昌が推舉なし、武士に取立て得ませんが、親の家名を引起す、忠義が第一。侍ひになる所存があるか、どうぢや。

源六 ハイ、こりやア有り難いあなたのお世話、何しにいさくさを申しやせう。一生お前、魚屋をするよりは、男と生れて、二本づゝも差すといふのは、誠に名聞でござりやす。コレ、噂ア、聞いたか。今からおらア、あの旦那のお世話で、侍ひになるワ。とんだ話したの。

せん オヤ、そんならお前は、お屋敷さんになるのかえ。その時はわつちやア、侍ひの下齒であらうね。したが、内侍さんだといつて、あなた方を騙した科で、どんな鞍替へに出やうも知れねえ。お前主さんに、いゝやうに渡りを付けてくんねえ。

保昌 氣遣ひ致すな。其方を頼みし平太有風、當館に留め置けば、殊更其方に科は無い。

せん エ、そいつは有り難いね。わつちやア又、とんだ事を頼まれて、しまひには、どう道行が附くかと思つたら、お祟りも來ねえで、こんな嬉しい事はねえよ。コレ、源さん、年明けの時は、こんなに嬉しからうな。

源六 それ、嬉しい次手に、内へ歸ると、直にめえはおれが下齒よ。時に、その侍ひには、いつ成りますね。モシ、ちつとも早いが勝手でござりやす。併し、今日は日が好いか知らぬ。

保昌 イヤ、後とも申さずこの所で、武士に取立て遣はす印し。この兩腰を、イザ立寄つて、帯刀いたせ。

ト大小を差出す。源六見て

源六 こいつは有り難い。噂アや、おらア大小を二本貰つたよ。

保昌 帯刀いたせば今よりは、某が傍輩、家名も改め、ア、何とやら。

源六 成る程ねえ。侍ひがお前、魚屋の源六でも濟まねえ話しさね。カウ、マア、この大小を差して見せやせう。

せん 折角ぬしのくんなすつたに、差して見せねえな。

源六 見や、おつりきなものだ。どうだ、似合つたか。棒手振りが大小差すとは、大笑ひだ。

保昌 帯刀いたす上からは、親の家名を其まゝに、三田の源太廣綱と名乗り、源家へ忠勤盡されよ、頼信公、天晴れの臣下、おめでたう存じます。

頼信 天晴れ勇士の人品骨柄。ハテ、勇ましい武士ぢや。武士ぢやなア。

源六 左様なら私しは、三田の源太廣綱と申しやすね。よく覺えて居にやアならぬ。ひよつと尋ねて来てくれた時、知らねえと云つちやア濟まない。コレ、どうだ、立派な侍ひと見えるか。カウツ。

せん ほんに、立派な侍ひさん、どうか見たやうだによ。

源六 これサ、もうそんな下卑を云ふな。てめえも今から奥様だワ。おらア侍ひだから、馬に乗るワ。

おぬしは乗り物でもあるまい。斯うしべい。玉の輿に乗せべい。おれが馬で、てめえが玉の輿に乗つて、この頃に堀の内へ行くべい。コレエ、大小を見て物を云や。

せん オヤ、大小の差しやうが、まんざらでもねえなう。

源六 さう云つても、親仁が昔取つた杵柄だ。てめえもコレ、武士の鼻アの氣取りでやツつけろえ。コレ、差し鹽梅を見たか。侍ひだから、二本差したワ。何の事はねえ、野郎の焼豆腐だワ。三田の源太廣綱といふ、二本差しの武士が、侍ひだぞ。コレ、下卑のない屋敷者だぞ。

せん アイ、わつちも屋敷者の女房、三日月お仙……イエ、その名は跡で附けやせう。なんでも主の、わつちやア女房でござりやす。

保昌 めでたいく。この上は奉公初めに、申し附くる一條あり。先年亡び失せたる、將門純友の殘黨丹州大江山に會合して、人民を悩ます訴へ。丹波丹後は保昌が領地。この上は彼の地に赴き、高名手柄を現はされよ。幸ひ飾りし御着長。

頼信 門出を祝ふ頼信が、與ふる着替への物の具。

ト二重舞臺に飾りつけある鎧を取つて

源家の武士になつたる印し。

ト差出す。

源六 ア、モシ、何かえ。大小貰つたその上に、鎧兜もくれるのかえ。せん ハテ、くんなさるなら貰ひねえな。質草にもならうわな。

源六 これサ、下卑を云ふな。併し、侍ひが鎧を持たぬは、醫者が藥箱を持たねえと一つだわえ。

源六 馬鹿を云へ。刺ツ子の絆纏は着たが、鎧を着る仕草は今度が初めてだ。

源六 やらかして見べいか。旦那、御免なさいやし。

ト重たさうに兜を着て、首をいろくにして

こいつは、とんだ龜の子醫者だ。イヤ、剛敵に重い。革頭巾よりやア剛敵に重いワ。

源六 よく似合つた。お前、その形で、淺草の市に出て、火打ち鎌でも賣るがい。

源六 イヤ、剛敵に重いワ。これでよく戦に働られるぞ。一番やつて見ようか。鼻アや、戦の相手になれえ。

せん おきねえな。人を馬鹿にした。

源六 それでも、戦の稽古だワ。向うから掛つてくると、此方へ飛びのいて、後から切ると、兜で斯う受けて、向うの奴を取ツ捕まへて、斯う投げて、ヤ、よいやサ。

ト一人立廻りをし、後の後見を捕へ、見事に投げる。

オ、堪忍しねえ。イヤ、剛敵に肩が張るワ。戦は按摩と首ツ引きだわえ。

せん コレナ、もう好い加減に歸りねえな。

源六 てめえ、その鎧を提げて來や。

せん これを持つのかえ。

ト鎧を提げて見て

こいつは、滅相に重いなう。

源六 御大層な。井戸端から一手桶下けると思やア、きつい事はねえワ。

せん それもさうだよ。

源六 そんならお暇申さう。

せん さうしねえ。

源六 ハイ、私しはもうお暇申しやせう。旦那、こりやア大きに御造作になりました。

頼信 然らば直さま丹州へ立越え

保昌 分捕り功名いたされよ。三田の源太廣綱どの。

源六 ハイ、この上よろしう、お大將様へ。保昌さま

せん アイ、又お近いうちに。
源六 ハテ、また下卑を云ふな。
せん こちの御亭主さん
源六 突ツ張りかへつて
保昌 御兩所、おさらば。
せん ハイ、突ツ張りかへつて
源六 お暇申しやせう。

ト三重になり、源六、兜を着て、大小を差し、不自由なる思ひ入れ。お仙、鎧を重たさうに提げ、捨ぜりふにて向うへ入る。若松、跡を見送り

若松 所詮この身に、疑ひ受けし上からは、頼信さまには添はれぬわたし。保昌さま、覺悟極めて

ト保昌が刀を取つて死なうとする。

保昌 ヤレ待て、何ゆる

若松 イ、エ、放して

ト立廻りながら三人、二重舞臺へ上がり、よろしくあつて

頼信 こりや頼信への面當てに、自殺なすのか。

若松 保昌さまのお詞に、身請けありしは人質と、仰せありしはこの身の素性

保昌 察せしなれども女童の、命にかゝはる事あらんや。即ち君の側室の其方、身請けなしたる年季

證文。

ト懷中より書き物を出し、若松へ渡す。この時、下の方縁の下へ、平太、左門之助を抱へ、忍び頭巾をかむり、窺ふ。若松、書き物を開く。伊賀壽の人相書ゆゑ、驚く思ひ入れ。上方、萩垣より、光遠窺ふ。

若松 こりやコレ伊賀壽が人相書

保昌 覚えがござるか。

若松 アイ、父に仕へし

頼信 さては主君の

保昌 娘玉琴。

頼信 知らぬ事とて

若松 エ。

ト思ひ入れ。平太、下家にてこなし。

主水 さては姉上。

ト奥より主水、走り出て取りつく。

若松 ヤ、そんなら其方は

保昌 見知らぬ弟。

平太 すりや、違うたか。

ト左門之助の顔を見る。

頼信 今のは床下。

保昌 コレ。

ト主水を手早く鎧櫃へ打込み、しやんと蓋をする。この時、上の障子屋體より時純、窺ふ。途端に向

うにて

呼び 勅使。

ト呼ぶ。皆々思ひ入れあつて

頼信 ヤ、思ひ設けぬこの館へ

保昌 上使入來の今日只今

時純 又ぞろ勅使と沙汰するは、何とも以て。

光遠 時純どのか。慥かに爰に

ト鎧櫃へかゝる、頼信見事に立廻りあつて、光遠を當てる。保昌振りかへり、時純を見る。時純、障

子をシヤンと閉す。若松、床の下へ思ひ入れ。平太、下より小石を取つて打ちつける。燭臺にあたり、

灯消えて倒れる。光遠きつと坐る。保昌、鎧櫃を押へる。この途端、一度に木の頭。皆々思ひ入れ。

向うにて

呼び 勅使。

ト呼ぶ。キザミにて拍子

引附けると、ツガギにて下り葉になり、引返す。

幕

本舞臺三間の間、結構なる本御簾を掛けたる高足の屋體、左右に照り蔭からみし萩垣、爰に和泉式部、
襦袢衣裳にて、手燭を持ち、伏屋初め腰元三人、めい／＼手燭を持ち、舞臺並よく棹に並び、出迎へ
ゐる。下り葉にて鷹揚に幕明く。

呼び 勅使

トまた向うにて

ト呼ぶ。三味線入りの下り葉になり、バタ／＼にて向うより平太、左門之助を引ッ抱へ、出てくる。

これを行長、冠り装束、公卿の形にて、平太を押し戻して出てくる。仕丁四人、勝色帽子、香臺、参内傘を持ち出てくる。平太、思ひ入れあつて

平太 見奉れば高位の御方、夜陰に及んで勅使の訴へ。さてはあなたは當館へ。

行長 暮れに及んで俄の勅使、歩行の路次に怪しき武士、小兒を同道いたす様子、仔細ぞあらん、何

とぢや。

平太 サ、この小悴を連れたる仔細は

行長 包むは曲事、そこ下がれ。

トまた鳴り物になり、ざり／＼と跡退りに来る。皆々舞臺へ来る。和泉式部、平太を見て

和泉 ヤ、お前は平太有風どの、左門之助を

トかゝる。ちよつと立廻りあつて、行長、二重舞臺の二疊臺へ上がる。

伏屋 勅使の御前

女皆 式部さま。

和泉 ハッ。

ト平太を留めながら平伏する。

私しは保昌が妻

行長 和泉式部とは、おことが事か。して又おのれは何者なるぞ。

平太 拙者は織仲の館より、周防の内侍を警固の武士、物部の平太有風と申す者。

和泉 下々の女を内侍に仕立て、當家に入りこむ有風どの、企みの一々有やうに。

平太 それも平の正盛と、課し合せし内侍の似せ者、手の上がつたる歸りがけ、即ち土産がこの小悴、

正しく隠まふ純友が

左門 我れこそ一子の十太丸。

和泉 ア、コレ、その名を滅多に

ト駈け寄る。

平太 さてこそ實名

ト思ひ入れ。

行長 こりや無禮なる勅使の目通り、式部物部の兩人は、皆私しの争ひにて、勅使の趣き取次ぐべき、館の附き人保昌は、出合はざるか、ナ、なんと。

ト御簾の内にて

保昌 即ちお請けは平井の保昌、つぶさに承知仕つてござります。

ト小鼓の合ひ方になり、御簾上がる。保昌、ツカくと下りて来り、平伏する。

行長 すりや、其方が源家の忠臣

保昌 數なりませねと平井の保昌、お請け申すは拙者が役目。勅使の趣き一通り、仰せ聞けられ下さりませう。

ませう。

行長 いかにも。今宵俄に發向せし、勅使は即ち櫻町中納言行長、禁庭よりの勅説。

保昌 ハツ。

行長 勅説の趣き外ならず、先達て頼信へ、預け置かれし太政官の御正印紛失、詮議の日延べ願ひのう

ち、祈念に用ゆる源家の重寶。蜘蛛切丸も石山にて、奪ひ取られしと巷の取り沙汰。かゝる大切

の重寶を、取失ひし頼信、酒宴に長じ、傾城遊女を館へ引入れ、上を恐れぬ身持ち放埒。何は兎

もあれ太政官の御正印、詮議の日延べも今日限りに、いま在所の知れざる時は、頼信に生害す、

め、首級を持參し、奏聞と仰よと、仰せの趣き右の通り。よきにお請け致してよからう。

和泉 すりや、失せ給ふ御正印、今日今宵手に入らねば、我が君様の御首、討ち奉れと勅使の趣き、

保昌 所詮今日只今まで、在所知れざる御正印、差上げまするお請けの儀は

行長 出来ぬと申すか。

保昌 なかく左様。

平太 在所知れねば頼信の寂滅。保昌どの、ア、近頃以て。

ト思ひ入れにて笑ふ。

保昌 貴殿は平太有風どの、内侍の似せ者同道なせし、こなたも詮議が残つてあるぞ。

平太 イヤサ、内侍と偽はり、下々の女を連れ参りしは、この家を詮議のおとりにもと、乗りこむ手蔓

の一段。純友が悴十太丸、隠まひ置くと聞いたゆゑ、ツイ横道から附け込んで、手蔓を書いた

この狂言。悴十太丸であらうかの。

和泉 どうしてその子が……そりや我が君の側仕へで。

左門 イヤ、某は純友の

ト云はうとする。

和泉 ア、コレ、滅多な事を云ふまいぞ。

平太 又云ふ我れと我が身の素性。

ト立ちかゝるを、行長、思ひ入れあつて

行長 扣へい物部。

平太 アイヤ、朝敵純友の血筋の者、この家に隠まひ置くゆゑに、拙者が詮議の

ト又かゝる。

行長 黙れ有風、よし朝敵の忤たりとも、寛仁大度の上の政道、殊に名智の保昌が、誤まりある事なし

置かんや、いらぬ助言聞き苦しい。但し其方、純友にゆかりの者か。

平太 アイヤ、全く以て。

行長 然らば其まゝ差置き召されい。

ト思ひ入れ。

平太 仰せの趣き、恐れ入りましたござります。

保昌 行長卿へ保昌が、密々申し上げたき一條あり、式部を初め女ばら、席に叶はぬ、次へ立て。

和泉 左様ござらば妾は次へ。左門之助も、自らと一緒に。

ト手を取る。

平太 アイヤ、その小忤には詮議があるぞ。

保昌 イ、ヤ、詮議は、おてまへにもかゝりますぞ。

平太 ナニ小ざかしき詮議呼はり、身が詮議より、手廻りに使ふ、小忤の十太丸、身共が詮議しぬいて見せうワ。

保昌 然らばそれまで、有風どの。

平太 平井の保昌。

保昌 式部、よしなに馳走しやれ。

和泉 畏まりました。女子ども、あなたのお側を、ナ、心得たか。

女三 奥の間へ。

平太 その馳走には。

ト立廻り、ちよつと思ひ入れ。管絃になり、平太先に、こなしあつて、和泉式部、左門之助の手を取り、伏屋その外腰元附いて奥へ入る。あと合ひ方になる。

行長 他聞を憚り行長へ、申すべきその一儀は。

保昌 勅の趣き、承知いたしてござれども、今日までも在所知れざる御正印、差上げませぬその時には頼信公の

行長 首打ち落して、渡し召さるか。

保昌 お痛はしくは候へども、源家の榮えを存する某、主君ながらも御首討つて

行長 磨に渡すか。

保昌 イ、ヤ、上使へお渡し申さう。

ト管絃になる。

行長 ヤ、なんと。

保昌 はや先達て關白より、當家へ内意の上使の來。それに又ぞろ頼信の、首討ち渡せと勅下り、い

づれへ返答仕らん。この儀、保昌は、何とも會得仕りませぬ。

行長 すりや、磨より最早先に、上使の者來りしとや。彼奴心得ぬ曲者ならん。行長、勅使に相違なき

しるしにはこれを見よ。

ト三建目に拾ひし扇を出し

越度これある頼信は、身持ち放埒情弱の振舞ひ。任に下りし頼光も、關東下向と偽はり、粧姫

と不義密通、證據は即ちこの扇。

保昌 すりやアノこの扇は、粧姫の御所持ありしを、行長卿の御手に入り、頼光不義の證據とな。戀歌

と共に繪は松ケ枝。

行長 操正しき松の繪は、疑ひもなき不義の證據、さすれば武將頼光にも、疑ひかゝらにやならぬ道理

されども事を穩便に、見遁しくれんは大の蟲、助けて殺す小の蟲。弟頼信に科を負はせて腹切ら

せ、首を磨へ、渡すか保昌。

保昌 サ、その儀は何とも、この場のお請けに。

行長 云はぬに於ては頼光諸とも、不義の刑罪、奏聞送けうか。

保昌 サ、その儀は。

兩人 サア〜〜。

行長 保昌、返答は何と。

トこのあたり、正面の御簾を上げ、時純窺ふ。

保昌 お渡し申さう。

行長 寶を渡すか、但しは首級か。

保昌 頼信どの、首を討つて

行長 鷹へ渡すか。

保昌 後夜の時計の鳴るを合圖に

行長 すりや、頼信の首を討つて

保昌 お渡し申さう。

時純 しかと首討て、平井の保昌。

保昌 ヤ、貴殿は上使の

時純 室津時純。

行長 ア、其方が

トきつとなる。また管絃になり、時純下りて來り

時純 上使の拙者が入來の後、又も勅使の行長卿、云ひ譯立たぬ頼信の、首討ち御持參なさるゝとは、

心得がたきその勅説。この時純が受取り歸るは、上使の役目、貴公のお手は借りませぬ。

行長 イ、ヤ、其方は關白職よりの内意の上使、鷹は朝家の役目を蒙むるこの行長、勅命うけてこの

家に来れば、頼信が首持參ですが、鷹が役目。

時純 イ、ヤ、拙者が改めて、受取る役目。青公卿ばらの指圖は受けぬ。

行長 立ちやく、時純。中納言行長に向ひ、詞を返すは奇ッ怪千萬。

ト時純へ打つてかゝる。保昌へだて、立廻り。行長、懷中より繋ぎ馬の旗を落す。保昌取つて

保昌 御懷中より繋ぎ馬の

行長 ヤ。

ト手早く懷中するとして、持つたる扇を落す。

時純 旗を所持する

ト寄らうとするを、以前の扇にて、さんぐに打つ。時純、この手を取つて

ヤア、緩急至極の行長卿、上使の室津時純を、笏の筈と思ひの外、大内官女の手に觸れし、戀歌

の書ある扇面にて。

ト立廻り。扇をもぎ取り、よき所へ捨てる。保昌取上げ、開き見て

保昌 大江に名立たる一木の松に、近江の湖水を描ける扇面、しるせし歌は「我が戀は、あらはに見ゆ

るものならば

時純 都の不二と云はれなましを」。

保昌 都の不二は比叡の山。

時純 湖水を眼下に我が立つ袖、都鎮護の比叡の山より

保昌 はるかに見下ろす

時純 平安城

ト保昌、開きし扇を好き所に置く。

行長 ヤ、なんと。

トきつとなる。これより詠らへの鳴り物。

保昌 過ぎし承平二年の事、伊豫の國にて藤原の純友、及ばぬ謀叛の企てありしに

時純 その頃威勢を振ひたる、下總の國猿島郡に、内裏を建て、新都を築き、おのれとのほる平親王。

行長 その將門も情なや、藤代川の一戦に、秀郷が矢表に、あへなく落命。

ト無念のこなし。

保昌 六十餘州を併呑せんと、東西企みし謀略も、事成る時は純友は、關白職と約束なし。

時純 將門、頭に金冠戴き、身には羅綾の衣をまとひ

行長 一天四海を一まねき。

時保 ヤ。

ト思ひ入れ。行長こなしあつて、落ちたる扇を取つてキツとなる。

行長 君子の徳は風なり、小人の徳は草なり、草に風を加ふる時は、草木も伏して一天下に、望みをか
けるこの扇を以てさし招がば、その望み叶はざらんや。

保昌 して、お勅使には、さほどの大義を

行長 アイヤ、いま兩人の詞についての戯れも、時にとつての一興々々。

時純 後夜を今宵に頼信が、首受取るは上使の役目。

行長 イ、ヤ、勅使が受取らう。

保昌 イヤ、お勅使へは保昌が、お渡し申す首級がござる。

行長 鷹に渡す首級とは。

保昌 この席にて沙汰ありし、將門が忤なる、將軍太郎良門が、首級をお渡し申ませう。

行長 ナニ行長に、良門の首渡さんとは。

保昌 只今お渡し申す良門へ、繩をかけて御覽に入れん。方々、計らひ申されい。

彌三 ハツ。

ト奥より彌三、里平、捕り手四人を随へ、小手脚橋、十手を持ち、出て來り

彌三 將軍太郎、腕廻せ。

里平 尋常に腕廻せ。

皆々 捕つた。
ト行長を取巻く。時純、これに構はず 悠々と二重舞臺へ上がり、其のみ居る。行長、思ひ入れあつて、

行長 ヤア、心得ぬ保昌が振舞ひ。この行長を良門なりとは、何を證據に。

保昌 黙れ、勅使の紛れ者。誠の上使の入れも知らず、うかく来るは籠の鳥。おのれら如きに頼信公の、首級をやすく騙らるべきか。嘴 青き小童めが。

行長 すりや、其方は行長を

彌三 將軍太郎良門と、保昌どのが目角に違はぬ紛れ者。

里平 勅使の似せ者、腕廻せ。

行長 慮外緩怠、下郎の分にて。

ト彌三里平を左右へ引退け、むらがる捕り手を見事に投げる。立廻りのうち、前の旗を落とす。この時

奥より國平、上下衣裳に改め、走り出で、素早く旗を取る。

彌三 常陸之助、お來やつたか。

國平 さてこそ勅使の懷中に、繋ぎ馬の旗を隠し持つたるは、只者ならぬ行長卿、實名包ます白狀あれよ。

行長 イ、ヤ、この身に覚えなき、良門呼はり、無禮であらうぞ。

保昌 たつて云はねば常陸之助、その旗、引裂き捨てさつしやれ。

國平 心得ました……サア、有やうに白狀なさねば、繋ぎ馬のこの旗、これにて引裂き捨てようか。

皆々 サアくくく、返答は、どうだ。

行長 サア、それは。

保昌 白狀するか。

行長 サア。

國平 旗を裂かうか。

行長 サア。

皆々 サアくくく。

保昌 良門なりと、名乗つてしまへサ。

行長 エ、残念な。戦場ならでは名乗るまじと思ひしに、保昌が眼力に、見顯はされし上からは、今こそ名乗るぞ、よつく聞け、桓武天皇の皇子、葛城の親土より四代の後胤、常陸の大掾國秀が弟、平親王將門が一子、將軍太郎良門が御面相を、よつく拜み奉れ。

皆々 さてこそな。

行長 勅使となつて入りこみしも、頼信の首討つて、あはよくば蜘蛛切丸を、我が手に入れんと思ひしに、斯く見顯はされし上からは、保昌、觀念。

ト打つてかゝる。立廻り。組子を切りちらし、國平が持つたる旗を奪ひ取り、手水鉢を踏臺にして、細代垣を飛び越え、落ちゆく。

彌三 ヤア、良門を取逃がしたか。

保昌 四方を圍んで、組みとめ召され。

皆々 ハツ……捕つたノ。

トどん／＼になり、皆々奥へ駆けゆく。時純、矢張り其のみゐる。

時純 保昌どの、折も折とて

保昌 いかにも貴殿の御挨拶、搦て、加へて折悪しき、只今の仕儀。お上使への手前、氣の毒千萬に存じまする。

ト二重舞臺へ上がる。

時純 イヤモウ、推察いたしてござる／＼。

トこの時奥にて、時計の五つを打つ思ひ入れ。

保昌 ありやモウ初夜の時計。

時純 後夜と云つても僅か一時。いよく頼信の

保昌 すりや御首を

時純 打とめ召さるか。

保昌 サアそれは。

時純 但し失せたる御正印、差上げ召さるか。

保昌 サア、その儀は何とも。

時純 然らば後夜の鐘までに

保昌 主君ながらも

時純 首を討ちやれサ。

保昌 承知いたした。

時純 それも古手の身代りは

保昌 ヤ。

時純 決して御無川。

保昌 正真正銘

時純 頼信の

保昌 お首をしかと

時純 受取り申さう。

トこの時、早めたる貝太鼓。

呼び エ、く、オ、。

ト関を上げる。保昌、思ひ入れあつて

保昌 良門召捕る組子の手配り。

時純 あの聲が。

保昌 いかにも。

時純 ハテ、仰々しい。

ト煙管にて灰吹を打つ。チヤン、と唄になる。兩人見得。バラ／＼と御簾下りる。ト鷹揚に道具ぶん廻す。程よくドン／＼になる。

本舞臺、正面、伊豫簾を掛けたる草葺き丸太柱の東屋、所々に植込み、石燈籠、うしろ黒幕、庭先の體。爰に行長、以前の形。衛士四人、白張烏帽子の形にて、突棒、刺叉にて取巻きある見得にて、道具とまる。

四人 良門、動くな。

行長 小癩な匹夫等、將軍太郎が立歸る、路次を支へる無禮緩怠、おのれ等一々睨み殺すぞ。

衛一 小癩な大言はざくとも、保昌どの、指圖を受け、取圍んだる上からは

衛二 朝敵相馬の將門が、叛逆うけつぐ太郎良門

衛三 尋常に腕廻せ。

四人 サア／＼／＼。

行長 おろかな事を吐かす奴等、うぬらに捕らるゝ良門ならず、ならば手柄に搦めて見ろ。
衛一 召捕る良門。ソリヤ。
三人 やらぬワ。

ト行長にかゝる。立廻りあつて、よき所にてキツカケ、皆々白張を脱ぐ。四人一様の形になり、キツと見得。これより夕方の鳴り物になり、遠寄せなりの鳴り物にて、行長、四人相手に立廻りあつて、皆々逃げて入る。良門、追ひかけんとする。時純、庭下駄、手燭を持ち出て、とどめ

時純 良門待て。

行長 なんと。

時純 汝この家に某ありとも知らずして、迂濶に入りくるうつけ者、名も無き官人雑式の、下郎に縛しめ捕られんより、今日の上使の室津時純、身が繩かける、腕廻せ。

行長 ヤア、云はれざる京家の武士、公卿侍ひの汝等に、組みとめられんや、そこ立去れ。さなきに於ては

ト掴みかゝる。時純、手裏剣を打つと、行長が腕に立ち、メザ／＼となり、立廻りにて小柄を抜き事をかしき小柄のあしらひ。將軍太郎良門に、生くら刃金が立たうと思ふか。たわけた事を。

ト小柄を抜く。

時純 ハテ勇ましき汝が生立ち。さはいへ、助かり難き朝敵良門、縛しめ捕るぞ。

行長 小癩な………覺悟。

ト切りつける。時純立廻つて、行長を引附け

時純 サア、動かれるなら動いて見よ。

行長 エ、残念な。僅かなれども急所の痛手、自由ならざる故にこそ、汝等如きに叶はぬか。エ、口惜しい。されども室津權の頭、我れを縛しめ高名なし、恩賞うけよ。サ、ちつとも早く、繩

かけいサ。

時純 ナニこれしきの高名手柄。さはいへ朝敵將門が

行長 血脈うけつぐ太郎良門。

時純 似せ良門の紛れ者めが。

行長 ヤ、なんと。

時純 將軍太郎の似せ者めが。

行長 ヤア、黙れ時純。桓武天皇の正統、平親王將門が一子、將軍太郎を似せ者とは、

時純 吐かすなおのれ。似せ者なりと見極めしは、この身の打ちし手裏劍の、腕に立ちしが慥かな證據將軍太郎は將門が、血筋を受けて不死身の五體、刃物の立つべきいはれあらんや。うつけ者めがさりながら、良門なりと偽つて入りこみしは、相馬の身内に極まつたり、サ、包ますその名を吐かすまいか。

行長 流石は室津権の頭、腕に立ちし小柄より、似せ者なりと見極めし上からは、何をか包まん、相馬の身内に於て、御厨が一子。或る時は野に伏し、山に生ひ立ちしゆゑに、鬼同丸と名を呼んで、浮世を狭く人となり、斯くまで巧みし今日只今、見顯はされし絶體絶命。これぞお家の重寶たる繋ぎ馬の旗。

ト以前の旗を出す。

時純 さてこそ一族。まこと將門が家に傳はる、繋ぎ馬とや。

行長 相馬内裡の滅亡の砌り、行くへ知れざる良門公。ほのかに聞けば關西にて、義兵の企て、これ幸ひと、紛れ入りこむこの館。もし天運に叶ひ、頼信が首を取らば、直さま主君の在所を求め、また運盡きて顯はれなば、良門と名乗つて生害なし、源家を計る愚臣が寸忠。その間に主君良門公、軍勢兵糧手番へなく、用意をさせん我が計略。さてこそ勅使と偽はつて、上使のおことがあ

るとも知らず、頼信が首を取らんと入りこみしに、貴殿に斯くまで見顯はされ、大望忽ち水の泡。エ、口惜しやなア。

トきつとなる。時純思ひ入れあつて

時純 若者ながらも天晴れの武士。すりや其方は良門と名乗り、討死なすべき心底か。
行長 おんでもない事。主君の身替り、腹かき切つて、

ト刀を腹へ突き立てんとする。時純、その手を捕へて

時純 コリヤ、うろたへ者めが。

行長 生害なすを、うろたへ者とは。

時純 將軍太郎が、なんで腹切るのだ。

行長 ヤ。

時純 將軍太郎は不死身の血筋、其方爰にて生害なすとも、無名の劍に命を落さば、似せ者なりと直ちに取り沙汰。そこに心が附かざるか。うろたへ者めが。
行長 實に誤まつたり。貴殿の詞。無名の劍で腹切らば、いかさま不死身とよも云ふまじ、そこに心が

ホイ。

時純 これにて腹切れ。

ト一刀を差出す。

行長 これで切れとは。して、この刀は。

時純 源家の重寶、蜘蛛切丸。

行長 すりや、この劍が、紛失なせし

時純 頼信武運祈りの爲、その形代の一刀、石山寺にて不思議にも、我が手に入つたる蜘蛛切丸、これにて生害なすなれば、不死身の五體を損なふ道理。良門なりと云はんや治定。生害なさばこの劍汝に渡さん。とく受取れ。

行長 ドレ。

ト取つて抜きかける。薄ドロくにて、蜘蛛現はれる。

さてこそ煉刃に蜘蛛の形、ありくと見ゆるは、蜘蛛切丸の一刀に、違ひはあらず、喜ばしや。然らばこれにて生害なさん。さはさりながら貴殿の胸中、劍を所持する御身は、源家に、恨みのきざしあつての事か。

時純 いかにも、上使と云ひ立て入り來りしも、後夜の時計に頼信の首、取つて歸れば其方が、願ひも

少しは叶ふの道理。我れも名乗れば九州にて

行長 源家の爲に亡びたる、もしやは伊豫の

時純 コリヤ……我が姓名は

ト思ひ入れあり。前の砂へ書いて見せる。

行長 さてはおことが

時純 コレ、秘すべしく。

行長 エ、嬉しや、喜ばしや、我が片腕の貴殿の家名、いま生害いたすとも、敵へ渡さぬこの御旗、

何卒主君の在所を求め、手渡しあつて、この場のあらまし。

ト肌を脱ぐ。

時純 氣遣ひ致すな、やがてめでたくめぐり逢ひ、旗を渡して其方が存念晴らせせん。最期を清う

ト旗を巻いて懐手する。

行長 云ふにや及ぶ。

トこの時、國平窺ひ出て

國平 良門、捕つた。

ト十手にてにてかゝる。行長、立廻りにてキツト留める。時純、氣を替へ
時純 身が手に及ばぬ、これなる良門、怪我せぬうち

ト東屋の内へわざと退く。

國平 この國春が召拙つて。

ト立廻り。この時、奥にて四つの時計聞える。

時純 後夜の時計が頼信の、知死期の刻限。

國平 ナニ我が君のお身の上。

ト思ひ入れ。時純キツとなる。チヨシと知らせ、籠、バラ／＼と下りる。行長、勢ひこんで

行長 イデ、切り抜けて。

國平 良門、捕つた。

トどん／＼烈しく、立廻りあつて、兩人キツと見得。この時、四つの時の太鼓にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、元の御簾屋體に戻る。平太、若松と主水を引附けてゐる見得にて道具とまる。直ぐに管絃になる。

平太 サア、玉琴どの、最前身共があれ程まで、髭合せし合ひ圖の手番へ、こなたは戀にほだされて
よくも頼信其まゝに、見遁したる上からは、この小丁稚こそこなたの弟、十六丸と白狀させ、又
も出世の種にする。いよくこなたの弟か。

若松 サ、薬の上より別れしこの子、見覚えはなけれども、情ある保昌どの、計らひにて

主水 その朝敵の純友が、實の悴と常からわしに、保昌どの、教へ事。

平太 すりや目移つて最前の、稚兒と思つた十六丸、こなたが誠の者なれば、正盛どのへ連れて行く。

若松 ア、モシ、妾は格別、どうもその子は。

平太 エ、面倒な。退かつしやい。

ト若松を突きつけ、主水を抱いて行かうとする。この時、左門之助走り出て平太に絶り

左門 聊爾なさるな、お尋ねの十六丸は、この左門之助。

平太 ナニ、われが誠の十六丸。

左門 イエ／＼、この主水は十六丸。

左門 イエ／＼わしが。

兩人 十六丸に違ひござらぬ。

平太 イヤハヤ、呆れたこの餓鬼めら。二人が二人十太丸。いづれ一人は替へ玉か。これを知つたは玉

琴どの。サ、何方がこなたの弟だ。キリ／＼云つてしまはつしやい。

若松 どうして妾は知らぬが眞實。どちらが實の十太丸やら、逢うたは今日が初めての事。

平太 イ、ヤ、知らぬとは云はせない。云はねば主人の娘でも、賣女に賣つたおのれなれば、ナニそれ

なりにして置かうか。餓鬼めら、キリ／＼吐かせ。

若松 イヤ、どうあつても二人の素性

兩人 イエ／＼、わたしは十太丸。

平太 ナニ偽はりを吐かしやアがるな。玉琴どの、こなたが知らぬといふ事はない。キリ／＼吐かせ。

斯うして云はせる。これでも云はぬか。カウ／＼／＼。

若松 こりや其方は、主人を手籠めに。

平太 主人でも何でも、世になきこなた、云はねばうぬ等も

ト三人を打ち据ゑ、二重舞臺より若松を引下ろし、入れかはつて平太、階段に踏みかけ、キツトとな
る。この時、御簾の内より白刃出で、平太を突く。「ウン」と苦しみ、落ちる。若松驚くこなしにて、

立ちかゝるを、管絃になり、白刃を引くと、御簾上がる。内に時純、抜き身にて立ち身。若松見て

若松 ヤ、お前は上使の

平太 ナニ、上使が某を

ト時純を見て

上使といふは

ト立ちかゝるを、また切りつける。平太苦しむを、引伏せ

時純 現在主人の姫君に勤め奉公、その上かゝる無法の打擲。天命思ひ知り居つたか。

ト立ちかゝる。平太、無念の思ひ入れ。

平太 エ、口惜しい。絀友が小倅十太丸を尋ね出し、正盛どの、手柄となし、この上出世の蔓にもと

古主の娘玉琴を、最前から苛なんだ、その天罰が身にかゝり、深手を負ひしもおのれゆる。うぬ

が素性も有やうに、白状なして。

トむしや振りつくの時純、したゝかに抉る。若松、二人をかばひ、恐れる思ひ入れ。

若松 妾が素性を御存じの、上使のお詞、もしや、お前も

時純 コレ。

ト思ひ入れあつて
つらく當りし長尾景道。まッこの通り。
トとゞめを刺す。平太落入る。時純有合ふ平太の刀を取つて
幸ひ彼奴がこの刀。

ト脇挟む。光遠出かゝり、窺ひ居て
光遠 朋友なれども玉琴どのに、敵たふ景道、手につけられしも尤も至極。
若松 ヤ、お前は太郎光遠さん。

光遠 あなたに戀慕と云つたのも、頼信が仲を裂かん爲。某とても時純と同腹中。されども敏き保昌が
預かり育てる十太丸、いづれ一人は似せ者ならん。

時純 十太丸をこの家に残さば、人質同然。何卒以て、玉琴どのと諸ともに、片時も早く。
光遠 心得ました。

ト呼子を吹く。菖蒲革の侍ひ二人、以前の長持を擔ぎ、ツカ／＼と出る。

時純 三人ともに、身が隠れ家へ。
光遠 心得ました。玉琴どの。

ト長持へ入れる。

若松 ア、コレ、なんでわたしを。コレ、頼信さまを

ト行かうとするを時純、二人の子役を若松もろとも長持へ打込み、蓋をして

時純 門の出入りは

光遠 身共がよしなに

時純 ござれ。

光遠 合點だ。

ト捨て鐘になり、長持を先に光遠附いて、一散に向うへ入る。時純見送り
時純 最早刻限来りしか。して、頼信は。

ト思ひ入れ。御簾の内にて

保昌 イザ我が君には潔う

頼信 保昌 介錯。

時純 ヤア、あの聲は。

ト管絃になり、御簾上がると、頼信、白無垢、水上下の形、三方に腹切り刀を載せて持ち、保昌、首